

# 続 ニッ 岩 狒 化 逆 門



東方project Fanbook  
折葉坂三番地

四十九里波越え了



「——ん、どうした？ 儂になんぞ用事かの」

穏やかな春の昼下がり。佐渡の化け狸、二ッ岩マミゾウは命蓮寺の離れ、縁側に座り込んで背を丸め、重ねた木の葉を何枚と繰っていた。

床に並んだ柏の葉には、人の目には見えぬ妖怪墨で、びつしりと文字が書きこまれていた。達筆な筆文字のそれをひらひらと振って示し、マミゾウは小さく苦笑。

「ああ、こいつか。佐渡からの便りじゃよ。皆、元気でやっておるとな。儂が居らんでも万事問題なくやっておるゆえ、もう戻って来なくても構わんなどと……まったく、憎まれ口を聞きおって。相変わらず素直になれん奴じゃな」

柏の葉の手紙に記された東光寺禅達という署名に、眼鏡の奥で目を細めるマミゾウ。その心は、遠く越佐の四十九里の海の果てへと飛んでいるようだった。

佐渡では古くより狸のことを『貉』——むじなと呼び、ゆえにここでもそう表記する。

平安のみやこにながらぐ暮らしていたマミゾウこと二ッ岩団三郎貉が、活動の拠点を佐渡に移したのは、承久の乱が過ぎた鎌倉時代の中頃である。この当時、佐渡には土着の妖怪貉が跋扈して覇を競い、さながら群雄割拠の様相を呈していた。

佐和田上矢の初右衛門、西三川椿尾の鵜掛老など、佐渡各地に一族を配してきた古老たちに交じって、九州より流れ着いた

玄翁、二宮の真光寺貉などなど、新興の貉達も勢力を増し、一足早い戦国の世であったという。

マミゾウもこれ以前から何度となく佐渡へと渡っていたが、それはあくまで客分としての立場であった。佐渡に本拠を移すとなると意味合いはまるで違う。海を超えてやって来た侵略者に、土着の貉たちの多くは怒りをあらわにし、彼女の排斥へと乗り出したのであった。

その中でも反抗派の急先鋒が、佐渡貉番付東の横綱、東光寺の禅達であった。彼がマミゾウに対して敵対を表明したのはかなり早い時期からであったが、その対立が決定的になったのはマミゾウが佐渡の西半分を平定した時分であった。

なお、古くより、狸貉の住む地域には、その地方の有力な貉が名を連ねる狸番付、貉番付なるものが存在しているが、これ以外にも、佐渡の貉たちが島内を巡業し相撲を取っていたわけではなく、人間がめいめい勝手に有名な貉を並べたものだ。しかし案外その格付けが正確なところからして、作成に当たっては、いずこかの貉の入れ知恵があったものと思われる。

……閑話休題。

「佐渡にはそれこそ何百という名貉がいたが、過去からいままで見回してみただけで、あやつほど頑強で強かな貉はおらんかったのう。なにしろ本身からして身の丈八尺を超える大貉じゃ。人に化けても巖のような豪傑でな。いっそ罷よりもでかかったかもしれぬ」

その豪快な外見とは裏腹に、禅達貉は東光寺の床下に住みつき、徳で知られる歴代の和尚たちとの禅問答を好むという智恵者であった。はじめは拙い知恵比べで何度となく和尚にやりこめられていたものの、門前の妖怪なんとやらで経文を覚え伝道

に親しみ、気付けば立派に仏門に帰依していた。

力もあり智恵もあり、化け貉としても一流となれば他の貉達  
が放っておくわけもない。禅達貉はいつしか佐渡の東半分の貉  
達の信頼を勝ち得ていたのである。

「図体は見上げるほどでかいくせに妙なところで細かいやつで  
なあ。他の貉が無邪気に人を化かして楽しんで居る中で、妖怪  
と人がどう向き合うべきか、貉はどうして人を化かそうとする  
のかなどと答えも出んような事ばかりを気にしておった。今か  
らしてみれば、長く仏門に触れていたゆえの思慮というものも  
あったのかも知れない。海を越えて、佐渡の貉達の行く末など  
を案じておった貉は他にそうおらんかったからな」

経を習い読み、小僧に化けて修行に励み、長じてしまいは  
和尚の代理を務めることもあったというこの禅達。はるばる佐  
渡の寺を訪ね歩いて禅問答に精を出し、子供や若者に説教まで  
する博識ぶりであった。

「儂につつかかってきた理由も、狗神刑部の名代を辞め、素の  
ままの一貉となったのならその証を立ててみせろと言うもので  
なあ。……つくづく無茶な注文じゃったよ。名代を務めるのが  
嫌になって刑部殿の元を逃げ出してきた儂に、そんなことがで  
きるはずもない。言い争いになるのは必然じゃった」

元は余所者のマミゾウが佐渡の貉達と馴染み、多くの貉と親  
交を広めるにつれ、禅達の態度はますます頑ななものとなつて  
いったという。

このくそ真面目な大貉は、佐渡が四国の支配地とされるので  
はないかという危惧を抱いていたのだ。当時すでに全国には稲  
荷を中心とした狐信仰が席卷し、狸達はかつての神格を失いつ  
つあった。新たに産まれる子狸は年々妖力を欠き、かつての名

のある狸達ですらも智恵を失くして禽獣へと追いやられていた  
のである。

残されたわずかな狸の領土である佐渡と四国は、それぞれ長  
らく独立状態にあったが——禅達はみやこより落ち伸びたマミ  
ゾウを、本邦の狸を統一し、狐へと対抗する四国八百八狸達の  
侵攻の尖兵だと考えたのである。

「まあ、儂も裸一貫でみやこを飛び出した手前、戻る場所なん  
ぞなかったからのう。侵略の意図がなかったかという嘘にな  
る。まだ儂も若かったしいう。余所者と舐められるのもまっぴ  
らじゃった。……売られた喧嘩は買わにやならん」

かくして東西の名貉によつて佐渡は二つに割れ、それぞれの  
陣営に与した貉達は、何度となく合戦を繰り返した。後の世に  
いう天下分け目の関ヶ原もかくやという有様であつたらしい。

佐渡じゅうの貉が化力妖力、知力体力時の運を結集し、人知  
れず佐渡の山野で、空で、湖で大激突を繰り広げた。その凄ま  
じきことは大地を裂き、海を割り、筆舌に尽くしがたいもので  
あつたと言うが——その多くは人知れず、山野の奥深くで行わ  
れたため、いまではわずかに百鬼夜行や貉火として人々の伝承  
に残るのみだという。

「ん？ 決着かの？ そりや勿論、儂の圧勝に決まっておる。

……と言いたいところじゃがの、残念ながら勝負はつかんか  
つた。お互いの陣地を攻めて守って奪い奪い返して、七年続い  
た大戦。死にかけたことも何度もあつた。

いい加減決着をつけようと、最後の最後にやった大化け百番  
勝負が、九十九戦四十九勝四十九敗一引き分けじゃ。儂は最後  
の一番を残した九十九回番目で精も根も尽き果て、満身創痍の  
疲労困憊で。もう負けても仕方ないと諦めてひっそり返つた

ら、丁度禪達の奴も泡を吹いて、一緒に目を回しおつてのう。何のことはない、儂もあやつも、引つ込みがつかんま皆の前で虚勢を張り続けておつたのよ。

それでな、もうなんだか争うのが馬鹿馬鹿しくなつてしまつてのう。双方手打ちにしてお終いにしたんじやよ」

そしてその場で、禪達はマミゾウに言つた。長らく佐渡に住み、多くの貉達に親しんできた自分と、佐渡の外から渡つてきたマミゾウ。それがこの七年をかけて佐渡の西半分と東半分を率い、勝負して双方引き分けて終わるのなら、どちらが上なのかは明白であると。

「ゆえにあやつは儂を佐渡貉の総大将に立てて、自分はその配下になるとして引いたんじやよ。貉の棟梁なんぞという面倒な役目よりも、その方が気楽だとも言うておつたがな」

後に、マミゾウの妻となつた関の寒戸お杉、重屋の源助、湖鏡庵の財喜坊を加え、彼等は佐渡貉四天王として団三郎貉を支えることとなつた。

佐渡の支配は盤石なものとなり、彼等は幾度となく海を超えて押し寄せた越国総鎮守一宮の宝徳山稻荷の勢力を撃退し続けたという。

「儂が幻想郷に来るにあたつて、佐渡のことは禪達らに任せておつたんじやが——さてはて、あちらも愉しくやつているようだなによりじやなあ」

そう言つて、マミゾウは手の中の楡の葉をぼいと投げ、鳥へと化け換えて己の指先に乗せ、笑うのだった。

(了)

初出…新潟東方祭14（平成26年4月13日）  
突発合同誌「ついでに」

Pixivより改稿して再録。id=3813816

# 続 二〃岩狝化逆門

【前刊あらすじ】

暇にあぐねて生来の旅好きの虫が騒ぎだし、幻想郷を抜け出して『外の世界』の観光に訪れた二ツ岩マミゾウ。その旅は数百年ぶりに狸の本領、四国を巡り讃岐、屋島の禿狸・太三郎や伊予の山口霊神・隠神刑部らの名狸の元を訪れる旅でもあった。

旅の中で、屋島や松山の名狸たちと新たな交流を育み、彼等に囲まれての松山城下の大宴会の最中、マミゾウの元に通の報せが届く。

マミゾウの本領、佐渡は相川の二ツ岩大明神で火災が起き、社が燃え落ちたというのだ。突如の事態に帰郷を決意したマミゾウは、松山より海を越えて飛び立った――

▼ 1

脂汗が滲み、息が荒くなる。夜闇の中でうねる瀬戸内の海の上、己の呼びだした化け式の鳳の上で、マミゾウは己の軽率さを後悔していた。

「――ちと、早まったのう」

吹き付ける風に煽られるなか、化け式は懸命に翼をはためかせる。それでも速度は遅々として上がらず、横殴りの風はふとした油断で化け式をその背のマミゾウをもろともに海へと叩き

落とさんとする。折しも台風が通り抜けた直後とあって、海も風もまだ荒々しく化け貉の行く手を阻む。

みるみる消耗していく化け式に追加の化力を注ぎ込み、マミゾウは雲間の星灯りを頼りになおも北を目指す。しかし夜の海のただ中で、正しい方角であるのかは判然としない。対岸の街の灯りは一向に近づいてくる様子もなく、気持ちばかりが焦る。(流石にもう、半分ほどは来ておるはずじゃが)

マミゾウの頬をつうつと汗が伝う。盛大に啖呵を切って松山城下を飛び出したのはいいが、風のように空を駆けていられたのも四半刻ばかり。いまはまっすぐ飛び続けるので精一杯の有り様だ。

(今夜はもう船便も途切れておろうし、これが一番早いのは間違っておらん筈じゃが、……にしてもしんどいのう)

じつとりと頸に浮かぶ汗の気持ち悪さに、顎を拭った時だ。

「うお……っ」

突如、横殴りの風に煽られて鳳が体勢を崩した。集中が途切れ、化け式がどろんと煙を噴いて消えうせる。

宙に投げ出されたマミゾウ、咄嗟に飛ぼうとするが、砂袋を括りつけられたかのように全身を包む疲労がそれを許さない。落下速度をわずかに食い止めるのがせいぜいで、鉛のように黒々とした海原がみるみる目の前に迫ってくる。

「ちい……ッ」

舌打ちひとつ。耳元で唸る風を聞きながら、マミゾウは歯を食いしばって懷に手を突っ込んだ。楡の葉を握り締め、全身から振り出した化力を込める。

立ち昇る白煙を裂いて、白い翼が力強く風を掴んだ。冷たい波に飲み込まれる寸前、新たに呼び出した化け式の背



で、マミゾウはぜいぜいと息を荒げながら膝を突いていた。

「……危機一髪じゃの。……参ったのう、この様か」

狸は、空を飛べるようにはできていない。今更ながらにそんな当たり前の事実を深く噛み締めながら、マミゾウは額の汗をぬぐう。知らず、幻想郷での生活に慣れてしまっていたように、すっかりこちらの常識を忘れていた。

慎重に化け式を飛翔させ、高度を保つ。変化に用いる葉っぱは、初心者向けの補助具のようなもの。この程度の化術の行使にも、そんなものに頼らねばならないほど余裕をなくしていることに、マミゾウは改めて自嘲の息を吐いた。

もともと空を飛ぶことを生業とする一部の妖怪を覗き、山一つ、海一つを軽々と飛び越えるというのは名のある妖怪にも難しいものだ。

怖れや信仰が失われつつあるいまの時代、妖怪達は、伝承によつて己の関連付けられた土地に縛り付けられている。自らの支配地を離れて長い旅をすることには非常な困難を伴うのだ。それは疾風のごとき天狗と同じである。

「三蔵法師が天竺へと旅をしつつた頃は、こんな不便はなかったのかもしれないあ」

汗に湿った髪を掻き上げて後ろで縛り、静かに呼吸を整える。振り向いた背中、松山の街灯りは向かう対岸のものと同じくらいに遠くなっていた。

「久々の旅路で、年甲斐もなく舞い上がっておった、というところかの」

自嘲と共に口元を緩める。本邦における狸の総本拠、しかも八百八狸のお膝元たる松山にあって、狸達への信仰は篤い。己がうちにふつつと湧き起こる妖力の滾りは自然とマミゾウを

高揚させていたのであろう。

なおも慎重に風を読みながら、マミゾウは化け式の翼を北へと向けた。



やつと二瀬戸内の海を越え、呉の起重機群を脇目に、マミゾウが広島港に降り立ったのは、夜の九時も半を過ぎようかという時刻。港前発の路面電車の終電前に滑り込めたのは僥倖と言えた。

それでも松山城下からの海を隔て、直線距離60キロ超をわずかに1時間で飛び切ったのであるから、この速度は狸界にあつて破格と呼んで差し支えないだろう。

混雑する座席の優先席シート前で、手摺にぐったりともたれかかり、扇子片手に顔に浮いた汗をぬぐう。

「んむ……どうにか今夜中に京都までは戻れそうじゃな」

スマートホンを弄つて新幹線の時刻を調べ、ついでに指定券の購入も済ませる。まったく文明の利器さまさまであった。

「こんなものがあるから妖怪も墮落するんじゃないやろなあ」

使いこなしている自分に言えた義理ではないがと自嘲しつつ、広島繁華街を通り抜ける路面電車をシートに揺られてしばし。マミゾウは窓の外を流れる景色を見るときもなしに眺めていた。

ここ広島は歴史ある町ではあるが、いまは妖怪達とはもつとも縁遠いところでもある。まもなく七〇年を数えようとしているあの戦争の爪痕はこんな形でも残っていた。その分、新興の都市伝説や、最近生まれた怪異の溜まり場になっているとも聞くが——いずれにせよ、いまは見聞を広めている時間はなさそ



うだった。

水都の暮れも高い広島白亜の駅舎。そこらの飲み屋の暖簾をくぐって、疲れた身体に酒精を補充したいところをぐっとこらえ、ホームへと走る。発車ベルの鳴り響く中で新幹線に飛び乗り、わずかばかりの荷物（無論、旅装の大半は小さな包みに化かして別につけている）を網棚に乗せて。

指定席のソファアの背もたれに身を沈めたところでようやくマミゾウは深い溜息をついた。

「慌ただしい夜じやったなあ」

ほんの半日前まで、隠神刑部の社に詣でて本邦の狸の行く末を嘆いていたというのに、いまや京都へと向かう車上の狸だ。旅好きが信条のマミゾウでも、ここまでの強行軍は滅多にこなした覚えがない。

さすがに疲れを覚え、眼鏡を外して目頭を押し揉む。

「……腹ごしらえも半端なままじやったな」

松山城下の饗応も途中で飛び出し、海を越えた消耗のせいでえらく腹が空いていた。車内販売を呼び止め、牡蠣弁当と缶酎ハイを注文する。

特急の揺れを感じながらの、旅情溢れる食事のはずだが、それも今はどこか味も素っ気なく感じられた。

「……………むぐ」

弁当を平らげながらも、マミゾウの胸を占めるのは、佐渡は相川で起きた火事のことだ。

自身を祀る二ツ岩大明神の火災というニュースは、老獺な化け狸をして平常心を保つには難しいものだった。しかし佐渡の貉総大将たるマミゾウには一大事であっても、人間達にとってはそうでもない見え、ニュースサイトを検索しても午後の更

新を最後に詳報・続報はなく、匿名掲示板群を漁ってみてもそれらしい内容は見つからない。

SNSのタイムラインを遡ると地元の青年団が様子を見に行った時の写真をアップロードしており、夕方までには鎮火したらしいことまでは確かかなようだったが――

「あまり悠長にはしておれんかしれんう。佐渡にも誰ぞ、もう少しいんたーねつとに詳しい者を残しておくべきじやったなあ」

時間の止まったような幻想郷は別にして、今の世の中、妖怪もIT化の波が押し寄せている。数年前、東の妖怪総大将、ぬらりひよんが不法侵入の罪に問われてセコムに追い出されたという話は多くの大妖怪達を震撼させた出来事であった。

佐渡に残してきた配下の狸達が上手く立ち回ってくれることを祈るのみだ。マミゾウが信頼を置く四天王、よほどのことでもない限り後れを取ることはないだろうが……。

（さて――どうなっておるやら）

胸中の不安はぬぐえず、焦れながらスマートホン弄っているうち、いつの間にか眠気が押し寄せてくる。

海を飛び越えた疲れもあったか、いつしかマミゾウの意識はまどろみの中に落ちていった。

「——お客さん、もしもし、終点ですよ」

「……んむ？」

うとうとと舟を漕いでいたマミゾウは、車掌に肩を叩かれて目を覚ました。

気付けば新幹線は煌々とした駅構内に停車していた。案内板には終点・京都の文字が明滅し、下車を促す車内アナウンスが繰り返されている。

「……寝ておったか」

鼻上に眼鏡を持ち上げ、ふわあと大欠伸と共に伸びを一つ。

目元に浮かんだ涙をぬぐい、荷物を手にホームへと出た。

京都——成立より千数百年を数える、この国で最も古きより続く都。四国への旅でここを経たのはほんの二日前のことになるが、随分と長い旅をして戻ってきたような気分だった。

案内板を見上げるが、本日の特急は大半が終電となっており、鈍行列車も近郊へ向かうものがいくつか残っている程度だ。飛び乗ったところで隣町に辿り着いておしまいである。

「ここまで来られただけでも重畳、とせんといかんのじやろくなあ」

現在計画中のリニアが完成すれば、京都と東京はわずか一時間足らずで結ばれることとなるらしい。そうなれば、あるいは今夜中にも東京まで出ることも可能だったかもしれないが、今はまだ夢物語だ。世界遺産となった富士山や、青木ヶ原の樹海

の磁場など、開発には問題が山積しているという話も聞く。

「さて、こうしておれん。今夜の寝床を探さんとなあ」

新幹線ホームを抜け、まだ人の賑わいが残る駅構内を進む。連休最後の日とあってか、構内のあちこちには旅行客らしき赤ら顔の飲兵衛たちが千鳥足でふらついていた。この有様ではホテルも旅館も大半が埋まっているだろう。今から飛び込みで泊めてくれる場所などあるだろうかとマミゾウは思案を巡らせた。これだけ有名な古都となると、寺社も大半が観光地化されている。軒先で夜が明けるまでというのは難しい。さりとてカラオケボックスやネットカフェ、公園で横になるのはなんとなく微妙に負けた気分なのであった。

「——仕方ない、あまり気は進まんがあの店にでも世話になるかのう」

寺町三条の地下に、朱硝子というバーがある。ここは京都の狸達の多くが馴染みとする店であった。マミゾウも噂に聞くくらいで、これまで訪ねたことは無かったのだが——気兼ねせず休息を取れそうな場所に他に心当たりがなく、そこで夜明かしさせてもらおうが無難かと思いながら、駅舎を出る。

こちらでは夜のうちにひと雨あったようで、駅の外は案外とひんやりしていた。半乾きのアスファルトを踏んだマミゾウの視界の端を、ふと小さな影が横切る。

(む?)

見間違いだと思いつつも、なんの気なしに視線を戻し、それがよく見知った姿であることに気付いてマミゾウは驚いた。

「——ぬえ？」

駅舎の前、石のベンチに腰かけていたのは、膝上丈のワンピースに膝上までのニーソックスを身に付けた少女。

封獣ぬえ——マミゾウの旧知の妖怪にして、千年前の京都を騒がせた大妖怪であった。流石に背中中の羽根は隠しているようだが、特に変装している様子も見られず、素のままの姿である。

「どうしたんじや、こんなところで？」

いまはマミゾウ同様、幻想郷に住む彼女がここにいることに驚きを隠せず、マミゾウは彼女に近付く。見れば彼女は全身ずぶ濡れであり、深く俯いた肩が小さく震えている。

「おい、ぬえ？」

「馬鹿っ!!」

伸ばしかけたマミゾウの手のひらをはたき、ぬえは肩を震わせて叫んだ。困惑するマミゾウの胸倉を掴み、思い切り詰め寄ってくる。

「——黙っていなくなるとか、無しだろ!! どこ行つたのかつて思つて、ずつと、ずつと——探したんだぞっ!!」

感情をほとばしらせたまま、ぬえはマミゾウの胸元に額を押し付け、丸めた拳でマミゾウの胸を叩いた。

雨宿りも満足にできないでいたのだろう。白いうなじに濡れた髪を張りつかせ、ぼす、ぼすと弱々しい抗議を繰り返すぬえの身体が、マミゾウの胸元を湿らせていった。

「あ……」

胸元に顔をうずめてしゃくりあげるぬえに、マミゾウは気まずい思いで頬を掻き——

「すまん、ぬえ」

謝る以外の選択肢を持たなかった。



宿は必然的に二人部屋となった。濡れ鼠で目元を泣き腫らしたままのぬえを連れ回してはどうかとも思えず、彼女を別の姿に化かし（ぬえは頑なに自分の能力を使おうとせず、マミゾウの腕に抱きついたまま離れなかった）駅前のホテルのフロントに向かう。部屋がダブルルームしか空いておらず、マミゾウは内心断られないかと冷や冷やしていたが——ホテルマンはプロの対応で快く応じてくれた。

後になって床が濡れていたことを不審に思われねば良いがと思いつつ、マミゾウはベッドに腰を下ろす。伸びをしてこきこきと首を鳴らした。

「……後は寝るだけと思つておつたが、えらく疲れたのう」

「勝手に好き放題したツケだろ。自業自得つてやつだよ」

シャワールームから顔を出したぬえが、髪を拭きながら現れる。バスタオルを巻いただけの姿で気にせず部屋を横切り、冷蔵庫から勝手にビールを取り出した。

泣いたカラスが何とやら。彼女はすっかりいつもの様子を取り戻している。まだ目元が少しばかり赤かったが、それには触れずにマミゾウはぬえが投げてよこすビールを受け取り、プルタブを引く。

「おぬし、本気で付いてくるつもりか」

「決まってるだろ。白蓮からも頼まれてるんだからね。ちゃんとマミゾウを連れて帰って来いって。見張り番だよ」

口元に白い泡髭をつけながら、当然だろと言うような顔のぬえ。マミゾウが幻想郷に持ち込んで以来、ぬえはビールをよく好んでいた。

白蓮の慈悲深さはマミゾウもよく知るところであるが、マミゾウはあくまで寺の客分である。ぬえの説明は命運寺の代表に

してはいささか筋違いとも思えた。

(察するに、ぬえに儂の後を追わせる方便というところかの) 苦笑しつつ、マミゾウも冷えたビールを煽る。味の濃いつまみも欲しくなるところだが、生憎と部屋の中には備えられていない。今からルームサービスを頼むのも億劫であった。

「だから、ここに置いてくとかはなしだからな、マミゾウ」

「わかつたわかつた。せんよ、そんな事は」

びしっと指を突きつけてくるぬえ。ベッドの上で無防備に素足を組んでいるものだから、タオルがまぐれて湯上りの肌が実にきわどい。――が、絶妙なところで大事な所が見えなくなっているのを眺めつつ、これも彼女の正体不明故なのかしらんと、マミゾウはぼんやりと思考を進めた。

「けどさ、ちよつと驚いたよ。マミゾウの社を焼くなんて骨のあるやつが佐渡にいたんだな。前から自慢してたじゃないか。佐渡で二ッ岩団三郎に逆らう奴なんかいないって」

「……そこが思案のしどころじゃの。はつきり言えばこれと言つて心当たりはなくてのう。偶然と片付けることもできるが、いささかたいみんぐが良すぎるのが気になる。前にも言ったと思うが、儂の留守を預かる者達は、そうやすやすと異変を許すような連中ではないからう」

マミゾウが佐渡を離れている間、かの島はマミゾウの配下である佐渡貉の四天王が治めている。いずれも四国の名狸に勝れども劣らぬ猛者たちばかりだ。そのなかで社を燃やすなどということができるものだろうか。

「……ま、どちらにせよ戻つてみるとわからんよ」

ビールを飲み終え、煙管を叩いて一服を終えたマミゾウはそう結論付けた。



「……さて。明日は早い。もう寝るぞ」

「えー、まだいいだろ、別に」

「駄目じゃ」

シャワーで旅の汗と汚れを落としたマミゾウは、ぬえの手からリモコンを取り上げた。有料番組を垂れ流していたテレビを消してベッドの上に横になる。ぬえはなおも文句を続けていたが、マミゾウが部屋の灯りを落とすと大人しくなった。

部屋の窓、カーテンの合わせ目の隙間から、なお輝く街の灯りがわずかに差し込んでいる。

「……………」

小さな気配が、ベッドを軋ませる。もぞりと寝がえりを打つマミゾウの背中に、ふと近づく感触があった。

背中にかすかな吐息を感じたと同時、こつんと少女の額が肩甲骨のあたりに押し付けられる。マミゾウは片目を閉じて眉をしかめ、本性を露わに尻尾を振りだした。

ベッドの中にぽふんと膨らむ大きな尻尾。ぬえは間髪いれずその尻尾に抱きついてくる。ふかふかの縞模様にくずまるようにして、ぬえはすぐに寝息を立て始めた。

少女のあどけない横顔と、その黒髪をそつと撫で、マミゾウはゆっくり目を閉じた。

▼ 3

翌朝。

朝日が千年王城を照らす中、旅装姿の二人ははやと京都駅のホームにあった。夜明けもそこそこホテルを引き払い、東京行の新幹線で一路首都を目指していたのである。

チェックの袖無パーカーにジーンズというマミゾウに対し、ぬえは肩から二の腕の肌もまぶしい黒の肩出しワンピース。

早朝とあつてか、車内の混み具合はさほどでもない。座席に並んで座り、窓に張り付いて時速270kmで行きすぎる光景に目を輝かせるぬえに対し、やや寝不足気味のマミゾウは欠伸が絶えない。

すぐ後ろに少女の寝息を感じながら、その柔肌に手を出すのを堪えて大人しくしていたという努力は、割合称賛に値するものであったが——そんな気苦労も知ってか知らずか、ぬえは隣で朝食のホットドッグにかぶりついてた。いや。時折見せつけるようにソーセージを齧っている様は、明らかに分かっているのだろう。

「ふむ、やはり東京で乗り換えが一番かろう」

携帯端末で経路を検索しているのを、興味津々で覗き込んでくるぬえ。ふと気付いて、マミゾウは聞いてみる。

「そう言えばおぬし、以前に僕を呼びに来た時はどうしておったんじゃ」

「んー？　へぐに、ふあっふあんは」

「食ってから喋らんか」

「……むぐ。別に？　普通にここから特急つてのに乗って、上越のほうに抜けただけだよ」

液晶の地図をぬえの指がなぞる。どうやら特急サンダーバードで金沢へ抜け、そこから北陸を海沿いに移動して直江津から小木へのフェリーに乗ったらしい。

空を飛んできたわけではないだろうとは思っていたが、思っていた以上にまとまなルートだった。実際に試して思い知ったが、今の世の中、人智を超えた妖怪であつても山越え谷越え風のようにひとつ飛びというのは不可能に近い。東京経由の新幹線よりも多少時間は掛かるが、下手に迂回の経路を探すよりも分かりやすく、路銀もこちらの方がだいぶ安いとあつては妥当であろう。

「ついてくるのは今更どう言わんが、騒ぎにならんよう大人しくしておれよ。おぬしの厄介事まで、面倒見るのは御免じやからな」

「わかつてるって、子供じゃないんだからさ」

小さく歯を見せて笑うぬえ。昨日の様子を見るにとても納得できないが、マミゾウは諦めてシートに腰を沈めた。懷から煙管を取り出して一服つけ、煙をくゆらせる。

「僕ももう少し、なにか腹に入れておくか」

マミゾウが車内販売を呼び止めると、ぬえがアイスクリームをねだったので、それも一緒に買い求めた。懷の札入れから紙幣を取り出すマミゾウをずっと見ていたぬえが、遠ざかるカートをを見て口を開く。

「なあ、マミゾー」

「なんじゃ」

「前から思ってたけど、なんでいちいち律儀に金払ってんのさ。人間相手の商売になんて、従うことないだろ？」

思えばぬえは、新幹線の改札でも微妙に不満そうだった。成程、実に妖怪らしい疑問と言えよう。

「確かに妖怪の理屈としてはそうかもしれないが、これは儂なりの礼儀の通し方じゃからなあ」

「あつちじゃ葉っぱのお金で古本を買い叩こうしてたくせに、良く言うよ」

「あれはあれで意味があるんじゃないよ。軽々しく一緒にしてはならん。……む、その顔は信用しておらん」

マミソウは弁当の唐揚げを口に放り込んで咀嚼し、お茶でそれを飲み込む。

「……むぐ。単純に言えばの、驚かす相手の問題じゃ。儂ら狸は——狸に限らず狐も貂も鼬も、化生は人を化かすことを習性とするが、それは単に興味でやっておるわけではない。その行いが儂らの格を高めることに繋がるからじゃ。磨き上げた化術で多くの人間を化かし、名をあげることは己の格や力を増すことにも繋がる。ぬえよ、おぬしとて同じじゃろう」

「……まあね」

「だが、それも相手が驚き、狸に化かされたと理解してくれるからこそ成り立つことでのう。こちらの世界でも、人間を煙に巻く位の事はたやすいが——」

マミソウは持ち上げた弁当の蓋を一万円札に化かし、さらにそれを五枚十枚と増やして見せた。人間達は電子制御やIC機器による個人認証などで偽造を防いでいるつもりらしいが、むしろそのような形のない暗号や情報を化かすのは狸の得意とするところであった。

「それをしたところで、こちらの人間達はそれを狸の仕業じゃとは思いません。精々が見間違ひ、気の迷い、神経を患つての幻覚と言つことで片付けてしまふ。奇妙不可思議な妖怪の仕業だとは微塵も信じてくれんのじゃな。」

そんなところで葉っぱを札束にしたところで、異物混入か、機械の誤作動、あるいは詐欺師の仕業にされるのが関の山じゃ。特にこのような、人だらけの都会ではのう。それでは単にくたびれ損じじゃよ」

加えて、妖怪への認知の薄い外の世界では、簡単な化術でも余分な力の消耗を強いられる。まったくもって割に合わないのであつた。

そこへ行くと、幻想郷の純朴な人々は、妖怪と共に暮らすだけあつて騙しがいのある者たちばかりだ。葉っぱのお金をみて、すぐに狸だ狐だ、化生の仕業だと察してくれる。そんな環境であれば、自然と化術も冴え、一つ一つの術にも力がこもろうというものであつた。

「少し気取つて言えば、人でないものが人の成りをし、人の振りをして通すのもまた彼らを謀ることに他ならんということかの。金の支払いに関しては、儂個人の心情じゃがな」

「ふーん」

「張り合ひのない返事じゃのう」

せつかくの説明も、ぬえには大した興味をもたらずものでもなかつたらしい。諦めて弁当の続きを口に運ぶマミソウの横で、ぬえもアイスに頬を緩めていた。

出発から二時間と少し。西と東の二つの都をつなぐ幹線路は二人を首都・東京へと送り届けた。静岡では車窓から富士山を眺めてその変わらぬ姿に感心し、横浜ではぬえが中華街に行き



たいと降りたがったりとひと騒動あったが、概ね順調な旅路である。

東京——いまのこの国の中心。京都よりもずっと新しい都。京都も人の多さでは引けを取らないが、ここはそこに輪をかけて混雑が酷い。歩く人々は皆忙しげに行きかい、間を惜しんでは携帯端末を広げ、電話の向こうに何かを怒鳴っている。平日の出勤時間帯とあつてか、背広姿が非常に目立った。

「はぐれんようについて来いよ、ぬえ」

「わかつてるって」

背中からの応えに頷いて案内板を見上げていたミミゾウだが、ふと違和感を覚えて振り返る。見れば、背を向けたぬえがそそくさと改札口を抜けようとしているところだった。

「こら待て、どこに行くんじや！」

「げ、もうバレた」

逃げようとするぬえの背中に手を伸ばし、羽根を掴んで引き寄せる。自慢の羽根を引っ張られたことにぬえが悲鳴を上げるが、ミミゾウは構わず彼女の肩を押さえこんだ。

「ミミゾウ、なにすんだよ、離せよー!!」

ぺしんと小突かれた額を押さえ、ぬえが大袈裟に痛がつてみせるのを呆れて見降ろしながら、ミミゾウは深々と吐息した。「おぬしは本当に……言つた傍から懲りんやつじやのう」

「いいだろ、ちよつとくらい寄り道したって」

「時と場合を考えんか。はじめに言つておいたはずじや。道中で騒ぎになるのは御免じやと。忘れたのか」

「うー。いまの都の見物くらいさせてくれたっていいだろー？ 京都は何度か見たことあるけど、こっちははじめてなんだからさ。散々自慢してたのはミミゾウじやんか」

ぬえはミミゾウに抱きつき、上目遣いに観光をねだつてくる。「それにさ、こつて今の帝が住んでるんだろ。どんな顔してるのか一度見てやりたくてさ！」

「……そんな事だろうと思つたぞい。悪いことは言わん。やめておけ」

「えー、なんだよー！ ミミゾーのけちー！」

このご時世に、皇居に黒雲と共に鶴の怪異などと、想像しただけでも頭が痛くなる。帝の御座所には今も変わらず守護があるだろうが、御一新の遷都を経た今、果たしてどれほど効き目があるのかは分からない。

鶴は古今東西の妖怪の中でも、その鳴き声によって直接帝を害した数少ない存在である。その性質は時代を経ても変わらぬものであるらしい。

「なー、いいだろ？ ちよつと脅かして来るだけだから。殺したりしないって。先つちよだけだから！」

「くだらんことを言つておらんで来い。乗り換えまでもう間もないぞ」

なおも抵抗するぬえに言い聞かせ——途中二度ほど、正体不明の種を使つて身代りを立てようとしてたりミミゾウを誘拐犯に仕立てようとしてたりと暴れた放題だったが——彼女の襟首を掴んで、ミミゾウは上越新幹線のホームへと向かった。



一時間半と少し。かつての三国街道沿いの線路を駆け抜け二人を乗せた新幹線は新潟駅のホームへと滑り込む。ミミゾウは懐の金時計に目を走らせ、

「……急げば十一時半のジェットフォイルに間に合うな。行くぞぬえ」

「えー!? もう疲れたー。どっか寄って行こうよー」

「いいから早くせんか」

駅前から直通のバスに乗り継ぎ、朱鷺メッセの脇をすり抜けるようにして港へ。

新潟港と佐渡・両津間を結ぶ航路を、ジェットフォイル『ぎんが』はフェリーの半分ほどの時間で駆け抜け、マミゾウはおよそ1年半ぶりの故郷の土を踏むこととなった。

京都からおよそ6時間で、およそ800kmの旅路を走り抜けたことになる。天狗も驚きの速度と言えた。

「ふむ……久々の故郷は良いのう」

固まった背筋を伸ばし頸を鳴らしながら、マミゾウは懐かしい佐渡の空気を胸一杯に吸い込む。朝方の寝不足は道中の仮眠で取り戻し、体調は万全に近い。

一方、ぬえはさつきから少しばかり蒼い顔をし、口元をハンカチで（マミゾウが貸したものだ）押さえていた。どうやら道中のジェットフォイルの中で酔っ払らしい。

「……マミゾーの嘘つき……あれ、揺れないって言ったじゃんかあ……」

「ああもテレビに翳りついておったらそりや酔うわい。あれでもこの時期のフェリーよりは十分マシじゃぞ。おぬし、前回どうやって佐渡まで渡って来たんじや」

「前に乗った時は全然揺れなかったんだよう……」

すっかり客が降りたジェットフォイルから、ふらつくぬえを引きずるようにして栈橋を渡る。

同時にマミゾウの胸のうちを、感慨と共に湧き上がるものが

あった。

それは信仰。佐渡猪の本拠、日本海に浮かぶ島に満ちた、狸への崇拜と恐れ——妖怪の力の根源である。四国のそれは強くまつすぐなものであるがゆえ、マミゾウ自身もいささか持て余すほどに強力だったが、佐渡のそれはまるで息をするように馴染む。

「——あ!!」

フェリー乗り場で観光客の出迎えをする人々の列に紛れ、声を上げるものがあった。たつと二人の元に駆け寄ってくるのは、兄弟と思しき二人の少年たちだ。

兄のほうは人間に言えば10歳。弟のほうは5歳ほどか。良く似た二人はマミゾウの前にびしつと直立し、気を付けから大きく頭を下げて叫ぶ。

「団三郎の大親分!! おかえりなさいませ!!」

「なさいませ!」

「おんや、随分と可愛らしい出迎えじゃのう」

マミゾウが眼鏡を押し上げて呟く。

「俺は真野曉森の小平太。こっちは弟の志郎です。大親分のお帰り、首を長くしてお待ちしております!」

「ました!」

幼いながら、きちんと年齢相応の人の姿を装うことをしている。なかなか将来有望な子猪であった。

そう思った刹那、弟のお尻のあたりから、ぴよこんと小さな尻尾が飛び出す。それに気付いた小平太は、慌ててそれを押さえ、元の通りに押し込んだ。

「げ、源助様から、大親分をお出迎えするようにといいつつきてきました!」

「きました！」

「そうかそうか。朝からずっと待っておつてくれたのか。遅くなつてすまんのう」

目を細めるマミゾウ。なおもかちこちに緊張している小平太が、マミゾウの後ろでぐったりしているぬえに目を止める。

「あの、そっちの人は……？」

「ああ、ぬえは僕の連れじゃよ。それよりもいまはちと時間が惜しい。挨拶は道々にして、早々に向かうとしようかの」

「は、はい！」

背中に定規を突つ込んだみたいに直立不動になつて答える小平太。そんな兄を見て志郎も同じようにピンと背を伸ばす。微笑ましい小狸兄弟の様子にマミゾウはくすくすと微笑んだ。

フェリーの着いた両津港から見、相川の二ツ岩大明神は、佐渡中央の国中平野を抜けた先にある。島内の公共交通機関と言えバスかタクシーだが、待っているのはまだるっこしいと、マミゾウはフェリー降り場の対岸でレンタカーを借りることにした。提示を求められた免許は、フェリーのチケットの半券を化かして誤魔化する。

「一応、昔にちゃんと取ったことはあるんじやが、どうにも更新が面倒でう」

「でも、平成年生まれつてどうかと思うな。どんだけ若作りしてんのさ」

「……五月蠅いのう。この成りで百歳超えておるなんぞと言ひ出してしようがなからう」

借りたのは4人乗りの軽自動車。助手席にぬえ、後部座席に志郎と小平太を乗せてもやや手狭な印象だ。さっそく窮屈だと文句を言うぬえを余所に、マミゾウはハンドルを握る。

軽快に走り出した車は、市街地を反対側へと向かい、人気がない小さな路地に入り込んだ。サイドブレーキを引いて車を降りるマミゾウに、小平太が慌てて声をかける。

「さてと」

「？ あ、団三郎様、相川はあつちの道ですけど……」

「分かつておるよ。ちと準備をな。……済まんが皆、一度降りてくれ」

首を傾げながら従う一同の前で、マミゾウは楡の葉を袖から取り出し、車のボンネットに乗せて念を込める。小さな掛け声とともにどろんと白い煙が溢れた。

白煙を切り裂いて、無人の車にびかっとライトがとめる。続いて響くのはおんと言う勇ましい唸り声。煙の向こうから飛び出してきた車が、ぶるぶると身を揺すつてクラクションの吼え声をあげた。

「ふむ。よしよし。なかなか素直な子じやのう」

眼鏡を押し上げ、満足そうに頷くマミゾウ。軽自動車は生き物めいた仕草で地面を跳ね、マミゾウの胸元に擦り寄るように駆け寄つてきた。

これぞ佐渡の二ツ岩貉が愛用する、乗騎の臘車である。はつはと忙しく排気音を響かせ、ライトを明滅させる妖怪車に、マミゾウはどこから取り出した酒瓶を示し、ボンネットを開けて突つ込んだ。

「幻想郷の酒屋で手に入れたとつておきじや。奮発するからしつかり頼むぞい」

ぶおんと返事。瓶がぶるぶると震え、瞬く間に酒瓶が空になる。酒臭いげつぷを吐いた妖怪車は、ナンバープレートをはたばたと揺らし、四つのタイヤを器用に使つて地面を跳ね、ハン

ドルをぐるぐると回して答えた。

目を丸くしている小平太と志郎をよそに、マミゾウはボンネットを低くしてドアを開ける軽自動車に乗り込んだ。やや遅れてぬえも続く。

「ほれ、どうした。二人とも、置いていくぞ」

慌てて後を追った兄弟は、乗り込んだ中でまたも驚きの声を上げる。

狭かった車内が見違えるほど広くなっていたのだ。窮屈な4人駆けのシートは広々としたソファアに代わり、並んで座ってもまだ余裕があるほど。再度デッキには冷えた飲み物やおやつまで備えられている。

マミゾウが行き先を告げると、妖怪車はカーナビを光らせ、飛ぶように走り出した。

「おうい、急ぐのは良いが交通ルールは守っておくれ。警察に目をつけられてはかなわんからのう」

妖怪車はただちに命令に従い、車線を揃えて信号を護り、制限速度で進み始める。それでも運転の必要もなく横になっていれば勝手に進むのだから楽なものだ。

「さて、それではしばし、ゆっくり寛ぐとしようかのう」

ごろんとふかふかのソファアに横になるマミゾウに、ぬえが口を尖らせる。

「こんなまだるっこしいことしなくたって、飛んでいけばすぐなのに。もうそんなに遠くないんだろ？」

「これでも十分に早い。このあとどうなるとも分からんしのう。できるだけ余計な力は使いたくないんじやよ。」

それに、こうでもせんと道中、酒は飲めんしな」

ウインクと共に、マミゾウは先程と同じ酒瓶を取り出し、そ

の瓶を叩いてみせた。

▼ 4

佐渡、相川。日本海に面したこの街はかつて、日本一の金山を備え、佐渡奉行のもと幕府の直轄地として多くの人々が住んだ大都市であった。往時の人口は十万人を超え、現在の佐渡の全人口の倍ちかくにも及んでいた。炭屋町、材木町、紙屋町の専門街が軒を連ね、京や各地の本店がこぞって支店を出し、遊郭には一流の花魁が集まり、島外から米や名産を運び込むほどであったという。

今もその名残を見せる街並みを見下ろす山の中。一行を乗せた妖怪車は狭く、ところどころ舗装の禿けた道を進む。ともすればハンドルを取られそうなデコボコ道だが、ふかふかのソファと妖怪車の器用なタイヤさばきもあって、車内に振動は感じない。

「――なんだ、これ」

山道が中程に差し掛かったあたりで、ぬえがくすぐったそうに背中を揺する。あたりに満ちる静かなさわめきを感じ取って、マミゾウはにんまりと微笑み、妖怪車の窓から身を乗り出した。途端、草木の、木々の、岩の陰から、次々に黒焦げの毛玉が転がり出した。佐渡に住む貉の群々である。

「皆の衆、出迎え御苦労！」

佐渡では狸を貉と呼び、ゆえにここでもそう記す。マミゾウの声に一齐に飛び上がった彼等は、騒がしく囃子声を上げながら、山道を登る妖怪車を取り巻くように坂を上のように駆け

だしていく。

あたりの山々に、佐渡の貉総大将、二ツ岩団三郎の帰還を報告に走っているのだ。はしやぎ転がり回る毛玉をみて、ぬえはなかなば呆れた表情でつぶやいた。

「すごい人気なんだね、マミゾウ」

「みんなが、団三郎様の御帰りをお待ちしていたんです！」  
小平太はまるで我がごとのように胸を張った。

坂を登り終えたところの駐車場で、妖怪車に『待て』をさせ、一同は目的の地、二ツ岩大明神の前へと降りた。

二ツ岩神霊の名を刻まれた古い石碑に、朱の門。茂る草木を押しのけるように、山道を無数の鳥居が連なっている。その数は遠目にも数百を超え、京都の伏見稲荷にも負けず劣らずの威容であった。……全体的にいささか古ぼけているという点を除けば。

火事から日も経っていないこともあってか、参道には立ち入りを禁じるロープが張られていた。とは言え他に人の姿もなく、邪魔はなさそうである。マミゾウがロープを跨ぐとした時、足元の子貉がマミゾウの裾を掴み、ぐいぐいと坂の上へと引つ張ろうとする。

「おん？」

不思議に思いながらも彼に促されて視線を向ければ、そこには連れ立った男女が二人。

片方はまだ若者の貉。あまり貉らしからぬ、生真面目そうな表情をしている。もう片方は穏やかな表情をした妙齢の雌貉。いずれもマミゾウには懐かしい姿である。

「源助、おろく！ 来ておったのか！」

「マミゾウ様、お待ちしていました！ お帰りなさいませ！」

若者の方が深々と一礼する。それに合わせて周りに集った貉達も一斉に頭を下げた。茶色い毛玉に囲まれ、ぬえが怪訝な顔をする。

「マミゾウ、こいつらは？」

「佐渡貉四天王、重屋おもやの源助げんすけ。その母、高橋おろく。儂の家内と息子じゃよ」

「はあ!?」

「おや、話しておらんかったかのう」

素つ頓狂な声を上げるぬえに、マミゾウはさして重要でもないというように告げる。団三郎貉と言えは佐渡の伝承では美男で通っており、幾人もの美しい妻や愛妾を抱えている事で知られていた。確かに年経た化生にとつて性別などは些細なことであるが——それでもぬえは衝撃を隠せない。

「あの、団三郎様、そちらの方は？」

「そうか、おぬしらは初めてじゃったかのう。封獣ぬえ。儂の長年の友人じゃよ」

「封獣……で、では、まさか!! あなたが京都の大怪異、鶴!!」  
源助の叫び声に、貉達が一斉にざわめいた。おろくも目を丸くして口元を覆っている。見れば小平太と志郎もぼかんと口を空けていた。

いきなり空いた周囲との距離に、ぬえは儼然と回りを見回す。

「な、なんだよ」

「かかか。いつもの威勢はどうしたんじや、ぬえ」

「う、うるさいなあつ」

気まずそうに羽根をもじつかせるぬえに、マミゾウがからからと笑う。

「こ、これは失礼いたしました!! かの御高名な鶴殿とは思ひ

もよらず、不躰な振る舞い、まことに申し訳ありませんッ」  
身を正し、深々とお辞儀を返す源助。他の貉達も慌ててそれに従った。

平安の世を大混乱に陥れ、あろうことか時の帝をも害したという正体不明の大妖怪、鶴。その恐ろしき名は遍くこの国の妖怪達の知るところであった。ぬえ自身あまり自覚せずにいるが、そのネームバリューは大江山の酒吞童子や白面金毛丸尾の狐に匹敵するものである。

「マミゾウ様と知己でいらつしやることはお聞きしておりますが、まさかこのようなお可憐なお方とは思わず、ご挨拶もなしに無礼なことを——どうかお許しを!!」

「かつかつか、この捻くれ者が可憐となあ」

「マミゾウ、うるさいつての!!」

ぶんぶんと背の羽根を振るって叫ぶぬえ。なにしろ彼女は生まれも育ちも平安京のハイソサエティ妖怪である。以前から顔見知りであることは知っていた源助も、マミゾウとぬえの親しげな様子を見て、あらためて佐渡の総大将への敬意を深めたのであった。

なおも興奮冷めやらぬ様子でぬえに握手を求め始める貉達を脇に、これまで後ろに控えていた、おろく貉がそつとマミゾウの前に進み出る。

「旦那様、幻想郷よりの長旅、お疲れさまでした」

「うむ。不自由をさせたのう、おろく。おぬしも変わらないか」

「はい。皆様にも大変良くして頂いております。旦那様、今回のこと、お留守を預かる身ながら力及ばず、申し訳ありませんでした。お杉さんも案じておられます」

「……そうか。後で顔を出してやらんといかんのう」



「ふふ、きつと驚かれると思いますよ」

「んむ、……まあ、のう」

意味ありげにぬえの方を見て、微笑むおろく。マミゾウは氣まずそうに頬を掻き、ぱたぱたと服を払った。

頃合いを見て咳払いを一つ。

「さて。再会を懐かしむのはこれくらいでしょう。今朝戻つて来たばかりで詳しいことはまだ聞いておらぬからのう。仔細を教えてくれぬか」

「はい。一先ずこちらにお願いします」

源助が先頭に立つて、参道を登り始める。貉衆達に連れられて、マミゾウ一行は後に続いた。幾重にも連なる奉納の鳥居をくぐり抜け、石組の階段を昇ってしばし。やがて木々の合間にできた小さな広場へと辿り着いた。

いや。そこは元から広場であつたのではない。

「……ふむ」

まだ強く残る、火の気の燦る灰と煤の匂い。足元のぬかるみは、消火の為に撒かれた水の名残だろう。木々の幹が痛々しく焦げて皮も剥げ、炙られてくしゃりと丸まった枝葉が揺れる。

往時は二つ岩大明神への参拝者を迎え、奉納の鳥居や機械時計、沢山の供物を並べ、祭時おいてには夜を徹しての信者たちの寝床となつたお籠り堂が——見るも無残に、燃え落ちていた。

堂舎は土台から黒焦げとなり、中に収められていた品物もほとんど炭と化している。炭となつて半ば崩れた柱組が、火勢の強さを感じさせた。

足元に転がる、煤まみれの時計の文字盤を拾い上げ、マミゾウは鼻上に強く皺を寄せる。

「なんとも、酷い有様じゃな」

「申し訳ありません。皆もなんとか食い止めようとしたのですが……お守りすること叶いませんでした」

「私たちの力が至らぬばかりに、団三郎様の社を危機に晒したごとく、お詫びいたします」

「そう氣に病むな。本殿が無事であつただけでも儲けものよ。もともと留守にしておつた儂の咎じゃ。おぬしたちが氣にする事ではないぞ」

うなだれる皆に向き直り、優しく声をかけるマミゾウ。それでも源助は受け入れ難いのか、悔し涙を滲ませている。

「事態を重く見て、いまは禅達様が東光寺で指揮を取つておられます。私達はここに残りましたが、他の皆様はそちらに詰めていらつしやいます」

「そうか。……して、一体ここ何があつた？」

「……はい」

源助が語つたところによると、概ね詳細はこのようなものだ。二つ岩大明神の社は、入口の山門と本殿へ続く参道、その途中お籠り堂で構成されている。

今回、火事にあつたのはこのお籠り堂であつた。

火の手が上がつたの十五日——一昨日の午前。山間から立ち昇る煙に氣付いた地元の貉達が駆け付けた頃には、お籠り堂はすでに炎の中であつた。折しも海からの強風の最中、火勢は凄まじく、堂を包んで撒き上がる炎は火の粉を撒き散らし、あたりの木々へと燃え移らんばかりであつたという。

このままでは本殿はおろか、相川の森全てが火の海だ。あまりのことに放心しかけた貉達であつたが、その対応は素早かつた。彼等はただちに火の手を防がんと、己の化術の粋を尽くして消火活動に当たつたのである。

ポンプに化けて水をぶっ掛けるもの、斧や鉋に化けて周囲の樹を斬り倒し、延焼を防ぎ――身を呈して飛び散る火の粉を防がんと八畳敷きを広げて煙を覆い、大火傷を負った者までいたという。

死力を尽くし、奔走した彼らの努力の結果もあって、どうにか延焼は防がれ、被害はお籠り堂と隣の木々数本で喰いとめられた。その代わりに、お籠り堂は完全に灰塵へと帰してしまっただという。

火がほぼ鎮火したところで、ようやく異常を察知した人間達が消防隊を引き連れてやってきた。彼等はいかほどの火の勢だったにもかかわらず、周辺への被害がまるでないことに首を捻るばかりであったという。

「私は相川からの伝令で報せを聞き、大急ぎで駆けつけましたが――その時にはもう火は鎮まっていました。何もしていないのと同じです。皆の奮闘が本殿を守ったのです」

「そうか……火の原因は分かっているのか？」

「それが……」

源助が表情を曇らせる。

「はつきりしていません。人間達の調査でも同じのようです。一番焼けていたのは竈とストーブのあるあたりだということで、参拝者の火の不始末が原因ではないかという話でした」

「ふーむ……」

マミゾウは腕組みをして顔をしかめる。

「夜の山が冷えると言っても、流石にまだ暖を取るような季節ではなからう。料理でもしておったのかのう」

焼け崩れた灰の中に埋もれた赤錆びたダルマストーブを一瞥し、マミゾウはその腹を軽く蹴り飛ばす。ごおん、と重い音が

山中に響いた。

「ここに居る皆も、火の出た現場は見えて居らぬのか？」

問われた貉達が、困惑気味にお互いの顔を見回す。その様子から、出火の瞬間の目撃情報を得るのは難しそうに思えた。

「マミゾウ様」

「んむ？」

源助は声を潜め、マミゾウの耳のあたりにそっと顔を寄せた。「ここだけの話ですが、宝徳山稲荷の狐が入り込んでいるという噂があるのです。真偽も定かではないので表立って取り上げではおりませんが、お社に火を放ったのも彼等の仕業ではないかと……そんなことを囁いているものもあります」

「ふむ。あやつらがのう」

マミゾウの狐嫌いが筋金入りであるのは周知の事実である。実際、越佐の貉達は数百年に渡って越後国総鎮守一宮、宝徳山の稲荷狐と争いを続けてきた。ここ数十年は落ち着いているが、それも冷戦に近い。

「連中が儼の不在に気付いたなら、十分にありうる話じゃな」

そこまでの強硬手段に出るかどうかはさておいて、可能性の問題ではあるが。

崩れた社の柱の墨を握りつぶし、ばんばんと手をはたいて、マミゾウは腰を上げた。

「成程、仔細は理解した。ともあれ、ここに居ってもこれ以上のことは分からぬかのう。名残惜しいが禅達のほうへ向かうとしよう」

▼ 5

徳和の山間、開けた田畑の脇に巨大な岩が点在する奇妙な道路の傍ら、鎮守の森に囲まれて、佐渡八十八霊場の第八十番、白毫山東光寺は存在する。

この寺は佐渡の南において室町の初めに建立された由緒正しき名刹として知られ、歴代に名立たる住職を輩出したことでも名を馳せる。三川徳和の領主、本間氏の庇護を受け、六百余年の長きに渡つてこの地を守つてきた。

その門前に洞をもつのが佐渡貉四天王筆頭、東光寺の禪達。マミゾウの不在にあつて、佐渡貉を統治する化け貉であつた。源助、おろくを加え六人の大所帯となつた一行であるが、マミゾウが息吹を吹きかけ、さらに化力を注ぐと、妖怪車の車内は豪華なリムジンの内装へと姿を変え、皆を悠々とこままで運んできた。またも途中の道で待ち構えていた貉たちに先導され、敷地の駐車場に乗り入れる。

すでに日も傾きかけているというのに、東光寺の境内は煌々と明るかった。四方に焚かれた篝火に加え、石燈籠には化貉の天火が灯り、昼なお明るく輝いている。

「おう、こりゃあ……凄いのう」

境内は人ならぬざわめきと賑わいに満ちていた。様子を見に来た地元の妖怪達が、ここ東光寺に詰めかけていたのである。妖怪車を降りるや否や、マミゾウ達はどつと彼らに取り囲まれた。小平太と志郎は怯えてぬえの背中に隠れようとする。

「いやはや……この度は災難でしたねえ、団三郎どの」

まずは赤泊の九天狗を代表して、徳和の天狗・野立坊が額の汗をふきふき火事見舞いの挨拶。続けて外山の主の金大蛇が鎌首をもたげてマミゾウを覗き込み、一山の砂金を尻尾で押しやる。その隣では重い根を引きずつて、樹齢二千年を数える川茂の太郎杉が眷族の切り株十輪を差し出していた。

色とりどりの燐分を散らし、微笑むのは美しい娘は瓜沢の蝶姉妹。幼子を胸に抱いて丁寧なあいさつをするのは越佐の海を泳ぎ渡つた立たず浜の白骨牛母である。いずれ劣らぬ西佐渡の名妖であつた。

そんな彼等の中でもひととき目立つのが、染め抜き日向五つ紋の黒留袖を纏う、初老の婦人である。肩には薄墨に染めた羽毛を襟巻の如く重ね、曇りない純白の髪に朱の髷墨を塗り、金細工の片眼鏡を付けたセレブリティ溢れる姿は、寺の境内からはいささか浮きまくっていた。

「御機嫌よう、マミゾウ様」

「……イビスか。おぬしまで来ておるとはのう」

「ええ。お社の火事と聞いてとる者も取りあえず駆けつけましたけれど、ご無事な姿を見てほつといたしましたわ」

どこか鼻にかかったハスキーな声で、背の羽根を揺すつて女はこころと笑つてみせる。

鴉群イビス——佐渡、ひいてはこの国の象徴とされる神鳥朱鷺の妖怪である。

「はるばる新穂から御苦労じやのう。見舞いは有り難く頂戴する。……しかし、その物見高さはもう少し治めたらどうかの」  
「あらやだ、わたくししたら……慌てていましたものでごめん遊ばせ。マミゾウ様の前にこのような恥ずかしい格好で」

十分すぎるほど身繕いを済ませているように見えるが、彼女としてはまだ不満らしい。イビスは絶滅寸前となった朱鷺の一族を養うため、人間達をかしづかせ、莫大な国家予算をほしいままにして暮らすセレブ妖怪であった。

門前に待たせてあったハイヤーはこういう訳かと理解しつつ、マミゾウは言いたいことを色々飲み込み、渋面で頷く。

「火事の一報を聞いてどうなることかと案じておりましたけれど、こうして大親分が御戻りなでしたら、わたくしがいろいろと気を揉む必要はないようですわね。此度の災禍、順徳院様も憂慮なさっておいででしたわ。くれぐれも、どうかご自愛を」  
「む」

イビスには、真野宮の神使というもう一つの顔がある。順徳院——真野御陵の御霊の名を出されては、さしものマミゾウも神妙にならざるを得ない。

「お言葉、謹んでお受けする」

「佐渡が争乱となれば、皆が悲しみます。順徳院様はそのようなことお望みではありません。無論、わたくし個人としても同感です。……どうか杞憂に終わるよう、願っておりますわ」

「まったくだぜ」

割り込んできたのは腹の底から響くようなどら声。

石燈籠が揺れるほどの地響きを立て、本堂から毛むくじやらの大きな姿がぬうつと顔を出す。

袖の破れた結袈裟を着た、身の丈十尺を超える巨軀。目も口も鼻もやたらに大きな造作で、ぼさぼさの髭と眉毛がそれをさらに強調する。極めつけが、額から頬にかけて左目をごっそりと抉る傷痕である。

まるで熊と見紛うばかりの姿だが、背中から伸びる尻尾と丸

耳は、まごうことなき貉のそれだった。  
どすどすと地面を揺らして現れた大貉は、マミゾウを挑発的に見下ろす。

「性懲りもなく戻ってきたのか、老いばれめ」

「ふん、儂が居らん間にまた太ったんじやないかの」

「てめえこそ、随分若作りしやがって。いい歳して色惚けやがったか。幻想郷とやらで負けておめおめ逃げ帰って来たんじやねえだらうな」

「ぬかせ、おぬしの手に余るようじやったから手助けに来てやつたものを」

佐渡猪四天王の筆頭、東光寺の禪達<sup>ぜんだつ</sup>は、そうやってマミゾウ達を出迎えた。



これじゃ騒がしすぎて話にならんという禪達<sup>ぜんだつ</sup>の一声で、門前に群れていた野次馬たちを散解させ、マミゾウ達は東光寺の本堂へと通された。

「気にすんな、どうせ和尚は出掛けてる。三日は帰らねえよ」

……というのは、留守を預かるはずの禪達<sup>ぜんだつ</sup>の言。

本尊が見降ろす畳敷きの堂内に皆が車座となる。八畳敷きと見紛うばかりの馬鹿でかい座布団にどつかと座り込む禪達<sup>ぜんだつ</sup>。その向かいにマミゾウとぬえ。源助はその横に腰を降ろした。おろくは皆から引いてやや後ろに控え、小平太も末席に畏まって正座し、そのとなりで志郎がちよこんと兄の真似をする。

「寺の本堂で化け狸が悪巧みの会合か。愉快なもんだねえ」

「命蓮寺も似たようなもんじやろ」

ぬえの皮肉をさらりとかわし、マミゾウは懷から螺鈿細工の煙管を取り出して火を付けた。

「やれやれだ。どいつもこいつも不景気な面並べて寺の前に居付きやがって。不安だ心配だと肝の小さいことばかり、騒がしくて叶わねえぜ」

「それだけ、団三郎様の事を案じて下さっているということでしょう。二ツ岩巖王様の威光がなお衰えぬ証です」

「源助よ。その信頼とやらをほったらかして、伊勢だ熊野だとふらふら遊び歩いてんのはこいつだろうがよ。てめえはちと身内に甘すぎやしねえか」

「団三郎様にはお考えがあつてのことです。自分が余計な口を挟む訳には参りません」

「あのなあ、源の字。誰に遠慮してんだか知らねえが——」

「お二人とも、その話は後になさってくださいな」  
顔を合わすなり陰悪な気配になり出した源助と禪達の間に割って入り、おろくが二人を制す。血筋なのかのうと一人納得するマミゾウの前で、禪達は軽く咳払い。

「率直に言えば、今のところ妙な動きは見当たらねえ」

二ツ岩大明神の火災に際し、禪達はすでにいくつかの対応を済ませていた。真野・佐和田・相川の貉達から事情を聞き集め、ただちに各地の貉に伝令を飛ばして社の警護と怪しげな連中の搜索に当たらせたのだ。同時に四天王を始め各地の貉達に警戒を強めるように通達を回している。

佐渡の妖怪達もこれに応じ、めいめいに警戒を強めていた。

「島外への出入りは、財の字に見張らせてある」

おい、と禪達が顎をしやくって見せると、奥から豆狸達が水を張った桶をえつちらおつちらと運んできた。傾けた水面に波

紋がひろがり、やがて一つの像を結ぶ。

『良かった、やつと繋がりましたね。』(無事でしたか、総大将)』

「うむ。おぬしも息災かろう」

貉にしては妙に細つこい、枝のような印象の青年である。糸のように細い目も合わせて、鼬にも似た雰囲気をもつが——彼は佐渡貉四天王の一角、湖鏡庵の財喜坊。佐渡貉の中で、二を争う妖術の使い手であつた。

この、水鏡を用いた遠隔通信は彼の特技の一つであり、財喜坊はこれの応用で佐渡島内外の出入りを監視しているのだ。加茂湖の済んだ湖面を鏡としての化術は、越佐の海を越えて遠くの様子をも見通すことができるという。

『両津、小木、赤泊、いずれの港からも怪しい者の出入りは確認できていません。同時に空からの侵入も監視は続けていますが、現在までその様子もなし。よほど特殊な方法を用いたのであれば、犯人は現在も島内に留まっている可能性が高いと思われるますね』

離れた場所を一瞬で繋げる方法がないわけではない。ふと脳裏をかすめるすきま妖怪の顔に、マミゾウはまさかと首を振った。あれは例外中の例外と考えていいはずだ。

「尻尾を出すまで様子を見るしかないということかのう」

「残念ながら」

マミゾウは腕組みをして頭を掻いた。煙管から立ち昇る紫煙に禪達がわずかに顔を顰める。

「……しかし、どうにも動機がいまいち掴めんな」

「それよ。誰が下手人かはこの際置いておくとしても、どうしてあんな馬鹿な真似をしやがったか。そいつが分からねえ」

禪達が相槌を打った。丸太のように太い腕を組み、欠けた湯

呑で茶を啜る。

「? どうしてつて、マミゾウが邪魔だったつてことだろ?」

「それにしちや、やり口が生温い。本気でこの老いぼれが邪魔なら、お籠り堂なんてつまらねえ場所を燃やすんじやなく、まづ社殿から燃やしちまえばよかったんだ。どうせあのボロ屋だ。普段からだられも居ねえんだからな」

「五月蠅いのう」

東光寺の禅達洞、新町大神宮の源助大明神といった、他の四天王たちの社に比べると、マミゾウの二ツ岩大明神の社が古び、寂れているのは否めない。しかしこれを理由にマミゾウへの信仰が薄いと考えるのは誤りだ。

四天王貉たちが神社や寺の一隅に祠を併祀されているのに対して、二ツ岩大明神は団三郎貉そのものを神霊として祀る独立した信仰の集まる神社なのである。他の信仰への『ついで』で崇められる貉とはそもそもその在り方が異なっていた。

「ですが禅達様、団三郎様のお社には、火元を誤魔化せるものがなかったのでは? 火の気がない場所です火事が起きてしまえば、怪しまれる可能性も増えてしまうはずです」

「そんなもん、蠟燭の火の不始末でも煙草の消し忘れでもいいだろうがよ。滅多に人が来ねえつたつて、道がねえ訳じやねえんだ。肝試しに来る連中も居たろうよ。なんとでもなる」

「火事の当日はかなりの強風でした。一歩間違えば山全体が燃えてもおかしくなかった。となれば出入りの多いお籠り堂を火元にすることはそれなりに自然な思考ではないでしょうか?」

水鏡の向こうで、財喜坊が同意する。

『偶然を装うか否かの差はあれど、今回のことが総大将への直接の害意によるものであったか、ということですね。仮に本殿

を燃やすことが目的であったとしたら——』

「少なくとも、こちらにある儂の信仰は大きく薄れるじやろうな。二ツ岩貉の社殿があそこだけという訳ではないがのう」

かん、と煙管を鳴らしてマミゾウが言葉を継ぐ。

「儂が佐渡を離れていたというのは、すでに広く知られておる。儂に恨みをもつものが、幻想郷から戻ってこれぬよう画策したというのは、それなりに納得のいくところじやな」

「では、やはり宝徳山の手のものが?」

「そいつはねえな。狐が混じってたらすぐに分かる」

『どうでしょう、彼等も越国総鎮守を預かる身。その気になれば徹底的に身元を偽ることはできるのではないのでしょうか』

議論百出。佐渡の化け貉達が揃って頭を絞り、侃々諤々と話し合いは続き、論議は3時間にも及んだが——結局、これといった結論は出なかった。

方針も、このまま警戒を続けて様子を見るという暫定的な対応を確認するまでに留まり、会合は散会となったのである。



▼ 6

……さて。

所変わって、佐和田は東大通り。国中平野の東西を貫く大通りには、ショッピングモールやホームセンターが立ち並び、行きかう人々の間に活気を見せていた。

時刻は午後8時を回り、陽はどうに沈み切りは暗闇。店舗の灯りが走る車の列を照らす。

「ん、どうした。食わんのか、ぬえ」

無然と頬杖を突くぬえの前で、マミゾウは次々とカラフルな皿をテーブルに積み上げていく。北雪酒造の純米大吟醸をグラスで呷り、既にほんのりと頬が紅い。

「心配せんでも儂の奢りじゃ。好きなものを頼むといい」

「言われなくても食べてやるっての」

マミゾウからメニューをひたくり、注文を告げるぬえ。

会合の後、禅達が申し出た饗応を辞して、マミゾウ達は佐渡の中央へと場所を移し、遅い夕食を取っていた。彼女達が陣取るのは地元チェーンの回転寿司。無論、全員尻尾や羽根を隠して人間の姿である。

「おぬしらもじゃ。遠慮せんで良いぞ」

「は、はい」

緊張する小平太の隣で、志郎は口元にご飯粒をくつつけ、ぱくぱくと銀舍利にかぶりついていてた。地揚げりの鰯がお気に入りらしい。

「ああもう、こつちまで飛んでくるから落ち着いて食えよ」

見かねたぬえが身を乗り出し、彼の口元を拭いてやるのを眺め、マミゾウは頬を緩めてグラスを空にした。

「……あのでかぶつはあんな糞のような成りをして置いて、心から精進でいう、しかも修行だなんだと理屈をつけていつも粗食じゃ。むろん酒もでてきやせん。歓待の馳走と言つてもたかが知れておらう。せつかく外に戻つて来ておるんじや。普段喰えんものを堪能しておかんとなあ」

「なら、もつと値の張るところに連れてけよ」

ぷうと頬を膨らませながら、ぬえ。彼女はあのまま歓待を受けなかったことに大分不満があるらしい。珍しく大妖怪扱いされたのがよほど気に入っていたと見える。

マミゾウはそんな抗議をどこ吹く風と、金びかに輝く大トロの皿に手を伸ばした。2カンを纏めて口に放り込み、

「もぐ。……回らん寿司はたらふく食うところじゃないからのう。やはり寿司となれば新鮮なネタをたっぷりと喰いたい。おぬしらもそう思わんか？」

「はいっ！」

ばあと顔を輝かせ、何度も頷く志郎。感動で飛び出した弟の尻尾を小平太が慌てて捕まえ、彼の背中を押し込む。

厚い身の乗った鰯を頬張り、マミゾウはそうかそうかと満足げに頷いた。

「それにいう、儂はああいいう場で出る油揚げがとんと苦手でな。あんな狐の喰い物をどうして皆が有り難がるのか、いまいちわからん」

呻くような独白に、いなり寿司に手を伸ばそうとしていた小平太が慌てて手を引つ込める。マミゾウの狐嫌いは筋金入りで

あるが、これは坊主憎けりや袈裟まで憎いの典型であつた。

「マミゾウの好みなんてどうでもいいけどさ。……そろそろ教えてよ。どうしてわざわざあそこを離れたんだ？」

「……ま、一言でいえば儂らの身の安全じやな」

さらりと言つてのける二ツ岩貉に、小平太がぎよつとして手を止める。志郎が手巻きのネギト口を口に含んで目を白黒させていた。

「誰も核心に触れられぬ会合なんぞ、いくら続けたところで時間の無駄じやからう。本音を言えばもつと早く切り上げたかつたところじやが」

「え、えつと……それつて……」

「簡単なことじや。外からの侵入者が入り込んだ形跡は見られない。しかし現に堂は燃えておる。となれば、怪しいのは元より佐渡に住んでおる誰かということにならう」

「ま、待つて下さい！　なんでそんな話につ……!?」

「おぬしの前で言える訳がなからうよ。この中に敵に通じた裏切り者がいる、という疑いじや。軽率に口にせせばそれこそ戦争じやからう。あのような場ではなおさら口にはできない」

「マミゾウの不在でもつとも得をするのは誰か。マミゾウをもつとも邪魔に思つているのは誰か。応えはひとつしかない。」

「え……そ、それつて、まさか」

口を開きかけた小平太に、マミゾウはそこまでじやと口元に指を立てて制止する。

「思つていても、口に出してはいかん言葉というのはあるものじやよ。一度形にしてしまったら、それはたとえ己の言葉であろうとも、己の心を強く呪縛する。心しておけ」

言い含めるように顔を見つめるマミゾウに、小平太は両手で

口を押さえたまま刻々と頷いた。志郎も兄の真似をしてぶんと首を振る。

「じゃあ、しばらくは様子を見るつてこと？」

「……泊まる場所の当てはある。まあ、あやつもさすがにそこまでの短慮ではないと思いたいのがのう」

やつてきた追加の冷酒を煽り、マミゾウは洪面で呻いた。



一行の今夜の宿となつたのは、佐渡の最高峰、金北山の麓にある温泉宿であつた。たつぷりとした湯量を誇る広い湯船につかつて疲れを落とし、浴衣に着替え、尻尾を存分に伸ばして布団に寝そべる姿は、さっきの緊張もどこへやら。すつかりだらけきつて緊張感の欠片も見られない。これが佐渡の貉総大将と言われて、どれほどの者が信じるだらうか。

「はああ……いい湯じやつたなあ。命蓮寺の天然かけ流しも良い風呂じやが、やはり佐渡の湯が一番肌に合う。生き返るのう」

「暢気なもんだね」

「目的があれば誰かしら仕掛けてくるじやらうて。さつきから随分と心配性じやな、ぬえ」

枕を抱え込み、寝そべつたまま器用に煙管を吹かしはじめるマミゾウ。

「あいつらの前で黙つてたことあるだろ」

「んー？」

小平太と志郎は、入れ替わりに温泉に向かつている。おそろしくこのタイミングを狙つて聞いてきたのだらう。マミゾウはうつぶせにのまませ煙管を上下に動かし、耳を立てた。

「……どうにも、ずっとたいみんぐが良すぎるのが気になってのう」

「火事の話か？」

「最初からじゃ。儂が隠神刑部どのに会いに言ったその日に、佐渡で火事。それ自体はまあいい、偶然じゃったと言えるかもしれんが、その報せが妙に都合のいい時に送られてきた」

「マミゾウが最初に疑念を抱いたのは、松山城下でメールを受け取ったその直後のことであつた。」

「化術に長けたものであれば、めーるの文面などいくらでも偽装できる。差出人のあどれすも、完璧に他人を騙れるじやろう。電子情報には実体という者が不在からのう」

「事実、マミゾウは幻想郷においても外の世界から漏れ出た電波や無線LANの尻尾を捕まえて、通信を化術プロトコルで騙し、外界のニュースなどを覗き見ている。」

「もともと儂は四国の狸からは嫌われておつた。長年世話になつた刑部殿に後足で砂を掛けて逃げ出したようなものじやからなあ。表向きは友好を保つて見せていても、腹の底ではどう思われているかはわからん。あの場に佐渡の貉との不仲を煽る格好で儂を陥れんとしたものが居つても不思議はない」

「この場合は、火事はただの偶然ということになるかもしれない。佐渡に手のものを送り込んでいたなどと、勘繰り始めればきりがないが——」

「ごろんと寝がえりを打って、マミゾウは隣に居るぬえを見上げた。」

「そして、どうにも腑に落ちんと言えはもう一つある。どうしてこども都合よく、おぬしが京都で儂の帰りを待つていられたのか——というのがな。のう、ぬえ？」

「……私まで疑つてゐるのかよ」

「かつつか。なにしろ、化かし騙しが仰臥起座の化け貉の日常においては、己すら信じるに値するかは難しくてのう」

「だが、その通りだ。ぬえが真実、幻想郷から姿を消したマミゾウを追つてきたのであれば、京都でぐずぐずしているよりも、まずは故郷の佐渡へ向かうのが自然と言えた。」

「そう言うわけじやからな、どこで尻尾を出すか、確かめさせてもらおうかの」

「ばか、やめつ」

「気付いた瞬間には、ぬえはマミゾウに布団の上に組み伏せられていた。暴れる白い脚が掛け布団を蹴飛ばすが、マミゾウを跳ねのけることはできず、浴衣の裾が乱れ、むしろ危うく肌を晒すばかり。」

「——ッ、マミゾウ……ッ」

「化け貉の手がするりと浴衣の合わせ目に滑り込み、華奢なぬえの肩を露わにする。化け貉が一瞥すれば、帯はひとりでするすると解け、少女の肌を遮るものは無くなってしまふ。」

「無防備な裸を晒す羞恥に顔を染め、ぬえは白い喉を震わせながら、視線を反らした。」

「マミゾウの指はぬえの薄い胸をまさぐり、あるかないかのささやかなふくらみを滑り、骨ばった鎖骨、うつすらと浮かぶ肋をなぞって——さらにその下へと進む。」

「刹那。」

「っ……!!」

「声にならない叫びが響き、マミゾウは横頬に強烈な一撃を食らって吹き飛ばされた。布団ごと壁に叩きつけられ、逆さまになつてずるずると床に崩れ落ちる。」

妖力の漲る異形の羽根を露わに、はだけた浴衣の胸元を押さ  
え、ぬえが涙目になってマミゾウを睨んでいた。

「痛つつ……ふむ。どうやらその反応は本物じゃな」

「っ、趣味悪い確認方法するなっ」

「やれ、すまんのう。一流の貉であれば外見はおろか、他の誰  
にも分からぬように化けるくらいは容易くするもんじゃからな」

「だからってなあ……っ!!」

ぬえが脇腹をぎゅっと押さえて声を荒げる。彼女の脇腹にあ  
る矢傷は、自分が討たれる原因となったもので、ここだけは誰  
にも触らせない。マミゾウはそれを用いて彼女の正体を確かめ  
たのだ。

なおも怒りが収まらないか、ぬえは牙を覗かせ、背中の羽根  
を逆立たせて唸る。目に滲む涙を手のひらで拭いながら、手近  
にあった物を次々に投げつけてきた。

枕が肩にぶつかるのも構わず、マミゾウは身を起こし、深く  
頭を下げた。

「……すまん、ぬえ。軽率じゃった」

「馬鹿……っ」

「悪かったのう。僕の不安をおぬしに押し付けてしまったよう  
じゃ。すまなかった。煮るな焼くかと好きにせい」

「……………っ!!」

あくまで姿勢を崩さないマミゾウに、ぬえはがりと牙を  
軋ませる。鞆を掴んだままじっとマミゾウを見降ろし、荒い息  
と共に肩を上下させて、しばし。

やがて、やり場のない拳をゆつくりと降ろし、ぬえは視線を  
反らして呟く。

「いまの。マミゾウじゃなかったら、その場で刺し殺してたん

だからな」

「……すまん」

「ほんとにさ、そういうところ、マミゾウは卑怯だよ。他にた  
くさん女がいるのに、お前だけ特別だなんて顔しやがって」

ふらふらと近付いてきたぬえが、マミゾウに倒れ込むように  
して胸に額を押しつける。なおもしばらくぐすぐすと、鼻をす  
すっている様子があつたが——マミゾウは敢えてそれを目に入  
れず、その頭をそっと撫でるに留める。

そうしておいて、マミゾウはちらりと廊下の方に視線を向け、  
細く開いた襖の向こうへと呼びかけた。

「というわけじゃから、のぞき見は遠慮してくれんかのう」

ガタンと襖を鳴らし、慌てて去っていく小さな足音に、苦笑  
して肩を震わせる。

「……可愛いもんじゃな」

そうこうしているうちに、ようやく落ち着いたか、ぬえが不  
貞腐れたように見上げていた。頬に残る涙の痕をそっと舌でぬ  
ぐってやると、ぬえはますます頬を膨らませて憎まれ口を叩い  
た。

「いたいけな妖怪の心をもてあそびやがって、非道い奴だな、  
マミゾウは」

「かつかつか。狸冥利に尽きるのう」

「どうせ、いまも裏でなんか悪巧みしてるんだろ。……正直  
に話せよ」

「むーどのない奴じやのう」

「ふん。置いてきぼりはもう御免だね」

伸びた手のひらを、ぬえの背から伸びた蛇がべしっと払いの  
ける。なおも諦め悪く追いすがる貉の手に、蛇の頭が変わった

羽根がしゃあつと牙を剥いて威嚇した。噛み付かれた指を振り払いつつ、マミゾウは顎を撫で、

「企みと言うほどの事ではないが……まあ、敢えて言えば、信頼かのう」

「……信頼？」

そんな言葉がこの化け貉の口から出るのかと、胡散臭げに顔を顰めるぬえ。マミゾウはからからと笑いながら、懷から蓮の葉を取り出す。

「ま、あいつのことは儂が一番良く分かっておるつもりじゃよ」

東光寺禅達殿

此度の災禍について、おぬしの真意を問いたい。

明朝卯の刻、真野・犬神原にて待つ。

二ツ岩マミゾウ

妖怪墨で書きつけられた、堂々たる一筆を示し、マミゾウは片目をつぶって見せた。

大神原。真野の南に位置する、かつての佐渡長者の領地である。佐渡最大の稲作地帯として十萬石を数え、日の落ちることなく黄金色に輝いた一面の田畑も、今は主を失い、緩やかな草原へと姿を変えていた。

北には頂に金北山を冠する大佐渡山地の山並が拡がり、東には国中平野の豊かな土壌も見降ろせる。

一面の草原にはざわめきがあった。まだ早朝にもかかわらず、広場に押しかけた佐渡じゅうの貉達がひしめいているのだ。

貉達は大きく東西の陣営に分かれ、それぞれ草原の中央を固唾を呑んで見守っていた。禪達とマミゾウの間に決闘状が交わされたという噂は昨夜のうちに佐渡じゅうを駆け巡り、貉は大も小も揃ってここに駆け付けていた。若衆が担ぐ輿に乗り、佐渡貉の最古老、初右衛門や鵜掛老と言った、隠居し長らく表舞台から退いていた貉達の姿までもが見られる。

皆が注視するのは芒ざわめく大神原の中央に陣取る、二匹の貉である、向かつて東の霊峰・金北山を背に、小高い丘の上に陣取るのは鷲めいた隻眼の大貉、東光寺の禪達。

いつもの檻褌袈裟ではなく、下ろしたばかりと見える真新しい袈裟をかけ、肩にはたすきのように大数珠を絡めている。伸び放題の髭に前髪の下から、ぎゅりと覗く隻眼が辺りを睥睨し、たまたま視線の合った若い貉を震え上がらせた。

それに相対するのが、西の平原にどつしりと構えるマミゾウ。

真野湾を背に、本家団三郎の正装である三つ紋を染め抜いた芒に満月の羽織を纏い、下は紺染めの袴に鈴飾りもきらびやかな黒下駄である。襟元にはいつもの市松模様のマフラーを重ね、蓮葉の笠を斜にかぶる。その背では、縞模様の尻尾がひととき大きく波打っていた。

狐や猫は尻尾の数でその格を測るが、貉の化力は尻尾の艶毛並みとその大きさに現れる。マミゾウの尻尾はこの場の誰よりも大きく、力強くも美しい。

源助、財喜坊といった他の四天王は二人からそれぞれ距離を取り、宙空に敷かれた赤絨毯の座敷に座っていた。そして。

『マミゾーウ！ 元氣ー!?』

否が応でも高まる緊張を台無しにして、姦しい声が響く。財喜坊の手にした銅の水鏡の中、はしゃぐように手を振るのは、佐渡貉四天王、最後の一角にして紅一点。関の寒戸せきとお杉。金銀羅紗の煌びやかな装飾に身を包む、美しい雌貉である。

透けるような餅肌と、艶めかしく紅い唇に、居合わせた若い雄貉達が揃って花の下を伸ばしている。魔性の肌の通り名そのままに、男を一目で魅了する娘であった。

彼女はある事情によって祀祠のある寒戸を離れることができないため、財喜坊の術でこの場を覗いているのだった。

『もう、せっかく帰って来たのに、うちに来てくれないなんてずるいじゃない。昨日も念入りにお風呂入って待ってたんだからねー?』

「んむ。ちと色々あつてのう。……じつくり話したいのは山々じゃが、ちと後にしてくれんかの」

『あん、待ってよう』



苦笑する財喜坊が、水鏡に張られていた水を酒瓶に移す。ガラスに包まれてなおかしましく続くお杉の応援を背に、マミゾウは小さく苦笑した。

「さて、そろそろ刻限か。ぬえ、離れておれ」

「わかった」

後ろに控えていたぬえが小平太と志郎を伴ってマミゾウの傍を離れる。不安げに揺れる小平太の瞳がマミゾウを見上げるが、マミゾウはそれに軽く微笑むのみで、禅達へと向き直った。

「さて、禅達よ！」

朗々とした声が犬神原を駆ける。

「逃げ出さず、遅れずに来たこと、まずは褒めてやるかのう。おぬしのこととはそれなりに買っておったつもりじゃが、どうやら儂が見誤っておったようじゃのう！ 儂の不在にこの横暴、もはや看過はできん。誰が総大将か、もう一遍教えてやらんといかんようじゃな！」

「さんざん留守にしておいて、今更親分面もねえだろうぜ。一遍外におん出たんなら、未練たらしく心残りぜずに、幻想郷とやらでよろしくやつてりやよかつたんだ。佐渡のことなんざ綺麗さっぱり忘れてな！」

草原の西と東、佐渡の東西を分け合った化け貉の二匹の視線がぶつかり合い、ばちばちと火花が散る。これは比喩ではなく、実際に音を立てて火花が辺りに飛び散るのである。万物を化かす化術に長けた化生同士が化力を漲らせると、その迫力は無意識のうちに辺りの様子を様変わりさせてしまうのだ。

稲光にも似た火花は、見物を決め込んでいた貉達にまで降り注いだ。鼻先を掠める火花に野次馬の貉達がわあわあと逃げまどい、草原に喧騒が響く。それでも彼等は近くの茂みに飛び込

んで恐々と様子を窺っているのだから、肝が据わっているのか物見高いだけなのか、些か判断が付き難い。

「ふむん。最後の機会じゃ。言い訳があれば聞くだけ聞いてやるぞ、禅達」

「お前こそ、申し開きがあるんじゃないかねのか、マミゾウ。なんなら介錯くらいはしてやつてもいいぜ」

「は、物騒な事を言うのう、坊主かぶれめが。おぬしも貉の端くれなら、こつちで勝負せんか」

「いいぜ。双方邪魔なし、一騎討ちだ」

どこからか取り出した榆の葉をひらひらと振って示し、挑発するマミゾウ。それを見て禅達は一步步前に踏み出した。

双方、鼻の上に皺が寄り、獣の本性が滲み出す。ざわりと蠢く気配が高まり、最高潮に達した。

刹那。

どんと空気を揺るがす大音声が、草原を駆け抜ける。芒原が根元から吹き飛ばされんばかりにうねる。腹いっぱいに息を吸い込んだ禅達が、思い切り腹鼓を打ち鳴らしたのだ。駆け抜ける衝撃が荒野を揺らし、たちまち茂みに身を縮めていた貉達を吹き散らす。

駆け抜ける衝撃波を、しかしマミゾウはものともしない。斜にかぶっていた蓮の笠がどこかへと吹き飛ばすのにも構わず、しっかりと両足でその場に踏みとどまり、力強く地面を踏み締めた。マミゾウの足元で揺れた地面が、生き物のようにうねりざわめき盛り上がる。みるみるうちに丘が脈打ち、山の津波となつて禅達へと押し寄せた。

大地を深々とえぐり、轟音とともに跳ねる土砂を蹴散らして、地面より飛び出したのは、なんと身の丈50mを越える馬鹿で

かい鯨であった。

これはマミゾウが地面の中でのんびりと虫を食んでいた土竜を化けさせたものである。安穩と居眠りしていた土中から引きずり出され、怒り狂った土鯨は潮の代わりに土煙を噴き上げ、波打つ大地を泳いで禪達に飛びかかる。

が、禪達は巨軀に似合わぬ素早さで地を駆け、素早く印を結んで鳶を編み上げた大投網を放った。罌のごとき剛腕で網を捻れば、土鯨はたちまちで絡め取られて身動きが取れなくなる。

禪達はさらに片手を空け、十尺はあるという鉈を担いで気合と共に投げ放った。眉間にどつかと鉈を突き立てられ、鯨は激しく身をのたうたせて地面に倒れ込む。

地響きと共に煙がもうもうと舞い上がり、その奥では眉間に爪楊枝の刺さった土竜が目回していた。

その時にはもうマミゾウは次の化術を放っていた。愛用の螺鈿の煙管から吐いた煙で見上入道をつくり、その巨腕をもって禪達を握りつぶさんとする。しかし禪達は大喝を叫んで己が剛腕でそれを受け止め、なんと真つ向力比べの上で入道をねじ伏せてみせた。見事な巴投げでもって投げ飛された入道を煙を上げて消滅するやいなや、禪達は素早くマミゾウに飛びかかった。岩も砕かんばかりの体当たりを、マミゾウは一辺が30mを越える巨大な塗り壁で受け止める。

「すごい……！」

誰かのこぼした声が感嘆となって犬神原に拡がってゆく。声はいっしょに歓声となつて、東西の応援合戦となっていた。

「どうした老いばれ。さつきから種の割れた化術ばかりじゃねえか。それで佐渡貉の顔のつもりかよ」

「っは、坊主かぶれが大口を叩きおつて。後悔するぞい」

双方の声援を背に受けて、見よ、これぞ化け貉の真価とばかりにマミゾウと禪達、二者の決闘はいよいよ激しさを増した。化力、知力、体力の粋を尽くした大化術の応酬が犬神原を揺るがせる。

マミゾウが釣瓶落としを呼び出して禪達を押し潰さんとすれば、かれは一匹の蠅に身を変じ、草の隙間を掻い潜って抜け出した。大木切り裂く化け傘の乱舞を、宙を飛ぶ金の鉢が絡めて撃ち落とし、大地を砕く巨大な煙管が、焼け付く炎に撒かれて溶け落ちる。

マミゾウの繰り出した化け提灯の閃光から逃れ様、禪達が印を結び、呼び出すのは憤怒の形相を浮かべた明王である。

むろんこれは本物ではなく、禪達の化術によるつくりものだ。仏道に身を置いた彼なりの矜持だろう。しかし形こそかりそめとて、その信仰は本物である。光背を背負った明王が火の矢を投げおろし、剣を打ちおろせば、大地は砕け火生三昧の炎に包まれた。

これに対し、マミゾウは牙が太刀ほどもある劍牙虎へと身を変じて、その剣を噛み砕いてみせる。かつて海を渡り大陸を放浪して、見聞を広めたマミゾウの変化は、この国の如何なる狸よりも多岐に渡る。不動明王はその名の通り、不動の決意をもって魔を討つ化身だ。絶対の攻撃を誇る代わりに、動きが鈍い。化術によってつくられた偽物となればそれは決定的な弱点となった。マミゾウはその隙を突いて虎の俊敏さで偽の明王を引き倒し、さんざんに踏み潰した。

しかしその時には禪達、既に真言を唱え終えていた。曇天を引き裂き空が割れ、そこから巨大な手のひらが姿を見せる。東京の一番でかい高層ビルディングでも、その小指一本にすらと

ても及ぶまい。

その中指に記されたのは、『齊天大聖到至一遊』の八字。傲岸不遜な美猴王を懲らしめた釈迦の手のひらである。

「かの孫悟空と同格扱いとは、光栄じゃなあ!!」

「お前の増長慢を叩き折るにはお詠え向きだろうぜ!!」

大地を揺るがし、仏陀の掌が大神原に馬鹿でかい手形を刻む。功德も力強さも横綱の百万倍には及ぼうか。下敷きとなったマミゾウ目掛け、律儀に五行山が投げおろされ、順に重ねて積み上げられた。

「団三郎様!」

ぬえの隣で小平太が叫んだ。

哀れ、かの齊天大聖のごとく、仏陀の功德を前に佐渡の二ツ岩貉も引導を渡されたのであろうか?

否。もちろん、否。

どろんと巻き上がる白煙。仏陀の指の間をすり抜けて、もうもうと広がる化煙の中から、現れたのは十人に増えたマミゾウであった。

「出た! 総大将の切り札だ!」

活目して見よ、これぞ、二ツ岩マミゾウの十変化。同時に十の変化を引き起こす佐渡貉の秘儀にして、幻想郷における聖徳王への妖怪の切り札として、ぬえが頼りにした力であった。釈尊すらも化かしてみせんと、巨大な五指をそれぞれ化け貉の分身一体が翻弄し、残る五人が禅達へと挑みかかる。

「一番、二番なぞとまたるつこしいこはせん、ゆくぞ禅達よ! 十番勝負、まとめて受けてみい!」

偽りの五行山を蹴飛ばし、芒原を揺らして一斉にマミゾウ達が奔る。それぞれが風を、大地を、獣と、鳥を、人を、蛙を、

化け術の粋をつくした変化が禅達へと繰り出す。十に分かれてなおその化術はいささかの衰えも見せぬ。

そしてそれを見降ろすのが、宙に陣取りどっかりと腰を下ろした、十一人目のマミゾウである。十と一人、どれが本体なぞという程度の低い化けはしないと言わんばかりだ。本体を含めて十一人、その全てが虚実を織り交ぜた化術なのである。

さしもの禅達も戸惑いを隠せない。素早く印を結んで繰り出された化術を防ぐが、文字通りの多勢に無勢。十一人のマミゾウにたちまち追い詰められ、逃げ場を失う。そこへ天を裂いて打ち降ろされるのは、先程の禅達の五行山のお株を奪う、千丈を超える巨大な大岩である。

大貉は咆哮と共に大岩を受け止めたが、流星のごとき質量に抗し切れるはずもない。禅達は為す術なく大岩の下敷きとなった。地響きが大神原を揺らし、大岩の下でぐしやりと何かが潰れる嫌な音が響く。

――が。

「ならば問う。この音、俺の頭より出たか、岩より出たか」

押し潰されたはずの禅達の、静かな声があったと同時に。

見上げんばかりの巨岩にびしりとひびが入る。粉々に崩れ去った大岩の中から、無傷の禅達が起き上がった。かち割られていたはずの脳天には傷一つない。

「……なんと」

マミゾウが驚きに眉を跳ねさせた。これぞ禅達貉の化術の極意。東光寺の歴代和尚と繰り返した禅問答にて磨いた独自の化術。相手への問答をもつて物事の真偽、表と裏、右と左を入れ替える奥義であった。

騒然となる大神原の中央、禅達は悠然と足を踏み出し、再び

重々しい声で問うた。

「俺はいま、進まんとしているか、留まらんとしているか」

「……、しまった——ッ」

即座の返答に詰まり、マミゾウが痛恨の表情を浮かべる。先選べば後が答え、後を選べば先が答えとなる。問答のどちらを選んでも悪手であり、しかし答えあぐねればそれも相手の有利となるのだ。

その時には禅達の体は音よりも早く空を飛び、丸太のような剛腕が、十一体のマミゾウのうちの一つを捕えていた。

「俺がいま打ったのは、本物であるか偽物であるか」

三度の問答。十の分身が同時に消えうせ、残る一人のマミゾウが剛腕をともに食らって吹き飛ばされる。本物と偽物を入れ替えられたのだ。

己が分身を生み出し、十の化術をもって翻弄するはずが、完全に裏目に出た。反撃が来るのは予期し、分身を身代りに立てて逃れるはずが——禅達の問答はそれを許さなかったのだ。

岩に叩きつけられ、血の混じった痰を吐いて激しく咳こむマミゾウに、禅達は片合掌に構えた手のひらを向ける。

「それで終いか、マミゾウよ」

「やるのう、禅達」

二人の笑みが凶悪さを増し、再び両雄の激突が芒原に響き渡った。



真野は小高き大神原。佐渡に住む六百の貉が詰め掛ける中で、東西貉大将・因縁の一騎打ち。それはまるで、数百年前に

勝負無しとしてお預けとなった、佐渡貉総大将を決める百番勝負の最後の一戦であるかのようにだった。

血を流し、叫び、化力の限りを尽くしてぶつかり合う東西の両雄。天地を化かし欺いて繰り広げられる激戦に、集った貉たちの声援にも力が籠る。

撃ち合う爪と牙が血飛沫を飛ばし、いつしか芒の原を赤く染めていた。その凄惨な争いを見ていられなくなったのか、浮足立った小平太が飛び出そうとする。ぬえはその肩を掴んで彼を制した。

「邪魔する気か？ やめときなよ。親分同士が本気でやり合ってるんだ。殺されるぞ」

「で、でもッ」

顔面蒼白となる小平太。見れば草原の向こうでも、源助が軽々に飛び出そうとした貉たちを制していた。

「初めに言っていたはず。これは二人の化け勝負。何があるうと手出しは無用！」

「で、でも源助様、これじゃあ、二人とも死んじまいますよ!!」

「マミゾウ様も、禅達様も、承知の上です」

ようやくこれがお祭り勝負ではなく、真実命をかけた決闘であることに気付いたのだろう。野次馬を決め込んでいた貉達が今更のように慌て始める。

そんな彼等の動揺をよそに、両者の距離は再び縮まっていた。

「どうした、マミゾウ。息が上がりてるじゃねえか」

「……まったく、おぬしのような筋肉達磨と一緒にせんで欲しいのう」

「ぬかせ。修練が足りねえってことだ」

禅達が繰り出す明王の掌が、マミゾウを左右から包み込む。

対するマミゾウは、肩を上下させながら化け式の蛙でそれらをかわし、地を転がってどうにか避ける。

「ならば、儼も出し惜しみしておる場合ではないのう」

マミゾウがおもむろに懐へ手と突っ込むと、そこから顔を出した化け蛤が殻の隙間から幻を吐きだした。これまでとは桁外れに大きな白煙が上がり、天空に巨大な影が姿を現した。ごうごうと吹き荒れるのは白い蒸気、周囲の温度が見る間に上がり、じつとりと辺りに湿気が押し寄せる。

現れたのは、ぐらぐらと湯を煮立たせる巨大な茶釜。特筆すべきはその大きさが山よりもなお大きなことだ。

「ふん、また古臭い手だな」

化術の仕掛けを一瞥で看破し、鼻で笑う禪達。が、マミゾウは慌てずに懷から一掴みの銅銭を取り出し、足元にそれを積み上げる。

一枚が二枚、二枚が四枚、子が子を産んでみるみる数を増した銅銭は、たちまち万を数えなおも増えて山と膨らんでゆく。

「かかか。まだ終っておらんぞ！」

そこに示されるのは、ニツ岩貉の貸し証文。相手は上州茂林寺の化け狸、守鶴。振りだす力はかの名器・分福茶釜である。

茶釜が煮立ち、ひととき猛烈な蒸気を噴き上げた。狸は五行で金気の獣でもある。マミゾウは己の化力に、財力という新たな力を上乗せし、守鶴の力を借り受けたのだ。

「東光寺の禪達貉、知力体力自慢は実に結構、ならば儼はこいつで勝負せんとな」

「……おいおい」

禪達が初めて額に汗をにじませた。この盤面でおお、ここまでの大化術を繰り出すマミゾウの化力の底の知れなさに、思わ

ず一步を引いたのである。

その隙を見逃すマミゾウではない。宙でひっくり返った茶釜から、禪達めがけ、蒸気と熱湯が波濤のように襲いかかる。

分福茶釜の湯はいくら汲めども尽きず、無限に湧き出す。湯を水に変えたところで一時凌ぎ、壁を立てたところで防げるものではないだろう。やはり化術勝負ではマミゾウに一日の長がある。いよいよ手詰まりになったかに見えた禪達だが――

「喝！」

彼は慌てず大きく胸を膨らませて息を吸い込むと、特大の大喝をもって叫んだ。同時に彼の隻眼がギリリと輝きを放ち、押し寄せる熱湯の天津波を包み込む。

途端、マミゾウの化術は茶釜ごと形を失い、見る間に溶けて崩れ去った。さながら光を当てられた影の如く、そこには何も残らない。

静まり返る草原で、禪達は静かに息吹を吐く。

「籠目、籠目よ。俺の目は見ての通りひとつしかねえが、だからこそ、大目よりも晃かにまやかしを敲う」

「なんとまあ、……貉らしからぬ術じやのう」

この秘儀に、さしものマミゾウも驚きを隠せない。

これはいわば反化術。貉にあつては掟破り、邪道のひとつであろう。化生の言葉通り、息をするように化ける妖怪を、根本から否定する力である。ここまで敢えて使わずにいたのも、禪達自身に迷いがあつたゆえのことか。

「何とも言え。出し惜しみは無しだって言つたろうがよ」

だが、もはや禪達は遠慮しない。片目を光らせる禪達は、その反化術の力をもって追撃に繰り出されたマミゾウの繰り出す化術を片端から無効化してゆく。

「なんだよ、あれ……反則だろ!!」

野次馬の中から悲鳴のような叫びが上がる。

化け猪の力を根本から覆す禅達の反化術——その力は大神原に集った猪達をもして震撼させていた。いかにマミゾウの化術が優れていると、その全てを無効化する禅達の前では無意味。

これでは千日手——あるいは、全ての化術を打ち消され、マミゾウが力尽きるのではないか。そんなさわめきが漏れる。

しかし、その中で正確に事態を把握している者達がいた。誰あろう、源助、財喜坊ら、残る佐渡猪四天王である。

「禅達様……何故、そこまで……」

そう、全ての化術を打ち消す力。それは化け猪の決闘においてこの上なく強力であると同時に、己を傷付ける諸刃の剣でもあったのだ。禅達の反化術は、猪の化術を根本から打ち消す力。複雑な盤面を将棋盤ごとひっくり返して、『勝負なし』にしているようなもの。

あの反化術は、禅達猪が化術勝負においてマミゾウに勝てないことを認めたに等しいものであったのだ。

「どうした、マミゾウ、そんなもんか!」

果たして、彼の嘲りに焦りが滲んでいるように聞こえるのは、錯覚であつたらうか。

さわめく野次馬達を前に、マミゾウはさらにいくつかの化術を繰り出すが、そのいずれもが喝破され、形を失ってゆく。

「ふん。埒が開かんな」

「抜かせ、お互い様だろうがよ」

肩で息をしながらも、疲労を振り払い、マミゾウは地を駆け回る。もはや両者に、化術は意味を持たなかった。化力の限りを使い果たし、両雄は徒手空拳をもって激突する。風を切って打

ち込まれた禅達の剛拳を、マミゾウが片手を犠牲に払いのけた。即座に左の抜き手。身を捻った禅達はこれを大口で噛みちぎろうとする。

マミゾウの腕が食い千切られんとする直前、跳ねあげた膝が禅達の顎を打ち抜いた。よろめく禅達の足首へ、マミゾウの尻尾が蛇のように絡みつき、力任せに地面へと引き倒す。鈍い音がして骨が砕け、禅達が苦悶の声を上げた。

さらに体重を乗せた肘で頭を狙ったマミゾウに、禅達は強引に体を引き起こし、その剛腕でマミゾウを殴り飛ばした。鋼と鋼が打ち合わされるような衝撃が走る。

禅達は躊躇わず追撃に移った。巨軀をもってマミゾウを押し潰さんと迫り、強烈な頭突きを叩きこむ。寺の鐘を力任せにぶち殴った様な轟音が轟き、地面に凄まじい亀裂が走る。

しかしマミゾウは気を失う寸前のところで踏みとどまり、今度は自分から頭を振り上げ、禅達の脳天に痛烈な頭突きを見舞った。先程にも匹敵する轟音が再度、衝撃波を伴って大神原を駆けける。

「つく、石頭がッ」

それでなお、罵声を吐いたのはマミゾウの方だ。眼鏡にひびが入り、額から流した血が頬を伝う。それを赤い舌で舐めとり、高ぶりのままに表情を笑みへと歪める。

「てめえとは鍛え方が違うからな。真面目に修行しやがれ」

「どこぞの坊主のような事はかり言いおつて」

笑顔とは、本来獣が見せる攻撃性の発露である。凄惨な笑顔のまま、爪が振るわれ、牙が打ち込まれる。血しぶきが飛び、骨が砕け、折れる音が続く。常ならば一撃で目を回してしまうだろう攻撃を、互いに受けながら無事なのは、単に妖怪として



身体が頑丈だからだけでは済まされない。禅達もマミゾウも、互いに身体を負傷を、無事な身体へと化かしてダメージを緩和させているのだ。

しかし、化かすというのはあくまで一時的なもの。実際の肉体が激しい損傷を被っているのは事実である。化力、妖力が付き、化術が解けた瞬間、全ての負傷は元に戻るのだ。

あまりにも凄惨な打ち合い。その迫力に圧倒され、集う貉たちは声もなく二人の戦いに見入っていた。

そんな中。小平太は必死になってぬえの腕を跳ねのけ、もがいて走り出そうとしていた。

「やめてくださいっ!! 総大将も、禅達様も!! お願いです、も、もう、こんなこと——!!」

「駄目だ。小僧が割って入っていい勝負じゃない」

「で、でも、これじゃ、二人とも——っ、二人とも、死んじやうじゃないですか……!!」

小平太が声にならぬ叫びをあげた時だ。

血がしぶき骨が折れ、尻尾が千切れ腕まで飛ぶ派手な殴り合いの果て、満身創痍となった両者が草原の左右に対峙していた。睨みあいも一瞬のこと。東西の貉は風のように地を走る。

交錯は一瞬のこと。芒が揺れ、空が軋み——駆け抜ける化け貉が互いに牙を繰り出した。魂を込めた一撃は激しく打ち鳴らされ、草原に衝撃と轟音を響かせる。

「……………ッ!」

皆が固唾を飲んで見守る中、東西の位置を入れ替えて、両者は芒を揺らし立ち止まる。

大きく肩を震わせていたのは、マミゾウだ。胸元に大きく血を滲ませ、足元に朱の飛沫が跳ねる。

がくりと膝を突いた二ツ岩貉に、犬神原じゅうの貉達からどよめきが上がる。

そして。

「——馬鹿もんが」

ごぼりと血を吐いたマミゾウが眼鏡を曇らせ、呟いた刹那。禅達の巨躯がぐらありと揺れ、仰け反るようにしてゆっくりと傾いてゆく。

東光寺の大貉は、その全身から力を失い、土煙をたてて倒れ込んだ。

犬神原は静まり返っていた。

長い決闘の果て、開いた口元からだらりと舌を垂らし、白眼を剥いて動かない大貉の前で、マミゾウは精根尽き果てたように座り込み、一人瞑目と共に吐息する。

生気の失せた禅達の身体は、先程より一回りは縮んで見えるかのようにだった。

「団三郎さまの……勝ち、だよな？」

「あ、ああ……。でも、いまのつて、禅達様……？」

「お、おい……。まさか……」

ぴくりとも動かない東光寺の大貉に、さしものお気楽な貉たちも異常を察知したか。あたりにどよめきが広がってゆく。

両者が牙を交え、片方が倒れ片方が立っている。誰が見ても明白な勝敗の結果だった。

だから——マミゾウから勝ち名乗りのひとつもあつてしかるべきだった。しかしマミゾウは禅達の前に座り込んだまま、じっと動く様子がない。

まるで、事切れた骸の前で盟友の死を悼むかのように。

曇る眼鏡の奥、俯くその視線は、何を思うものか。

爪に付いた血飛沫を払い、口元の汚れを拭いて——がさりと揺れる茂みを振りかえらぬまま、二ッ岩貉は問う。

「……小平太か」

名を呼ばれ、びくつと背筋を震わせる子貉。かちかちと齒の

根を鳴らしながら、小平太は這いずるようにしてマミゾウの前に進み出た。

「あ……う……、お、大親分……つ、」

「遅かったのう。ずいぶん待ったぞ。……のう、おぬし、何故あのような事をした」

「う……」

「答えんか、小平太よ！」

鋭く叱責するマミゾウに、小平太は落雷に打たれたように尻尾を逆立たせ、がばと地面に伏した。引き攣ったように肩を震わせ、鼻を吸りながら、額を懸命に地面に擦りつけ、途切れ切れに声を絞りだす。

「お、俺つ、……お、大親分が、い、いない、のが、つ、つまなく、てつ……、み、皆だつて、寂しいつて言ってるし……お、大親分に、戻つてきて、欲しくて、それで……！」

「それで、儂の堂に火を付けたのか」

「つ……！！！！」「ごめんなさいつ、ごめんなさい！！」

あ、あ、大親分！！」「ごめんなさい……つ……！！」

怒る気も失せるほどに、無邪気で、短慮な理由だった。

ずっと飲み込めずにいた罪を吐露し、鳴咽に交じつての謝罪が繰り返される。もはやそれ以外に言葉を持たぬのだろう。畏れの中で地面に擦りつけられた額から血が滲み、子貉の喉を引き攣らせる。

ぬえに付き添われ、近くにやってきた志郎が震えながら、その様子を見つめていた。

「で、でも、俺、こんな……こんな事になる、なんてつ、その、思つて、なくて……つ」

「しかし、正直に本当のことを喋るのは、いつでも出来た筈じ

やな。何故それをせんかった」

「そ、それ、はっ……」

「誰か、悪い奴に脅されておったのか。都合のいいことを吹き込まれて騙されておったのか。狐にでも寝返って、儂を謀るつもりじゃったか。だんまりを決め込んでいた理由は何じや」

「……あ……あのっ……」

子貉の背中が激しく波打つ。がたがたと震えながら、小平太はひたすらに平伏するばかりだ。

「答えよ、小平太」

「ち、……違……」

「聞こえんぞ！ はつきりと申せ！」

動かぬ禅達の前、じつと俯くマミゾウの一喝に、小平太は喉から嗚咽を絞りだし、ついには泣きだしてしまう。

「ち、違います、そんなんじや、なくって……!! お、俺、こんな、こんな事になるなんて、思って……なくてっ……、火、火も、ちゃんと消せば……大丈夫、だから……た、ただ、大親分が、戻って来てくれるって……思ってた、だけでっ……!!  
ごっ、ごめんなさいっ、大親分、ごめんなさいい、ごめんなさいい……!!」

「全部、おぬしが、一人でやったことか」

「は、はいっ……」

蹲ったまま震え、涙声のままひたすらに背を小さく丸めて答える子貉。

源助、財喜坊貉達がゆっくりと近づいてくる。ぬえは志郎の背中を押して、小平太のすぐ隣に進み出た。彼らの姿を見つつ、マミゾウは立ち上がる。

「その言葉、誓って嘘はないな」

「はい……ッ」

強張る体のまま、小平太は押し寄せる恐怖に身を硬くした。

「——だ、そうじや。禅達よ」

え、と小平太が間の抜けた顔を上げた。さつきまで確かに死んでいたはずの巨軀が、長い息を吐いてむっくりと起きあがる。

「参ったな。俺の監督不行き届きかよ」

呻きながら腹の傷をさすり、頭を掻き毟って長い溜息をつく東光寺の大貉。

犬神原に、貉達の歓声が響き渡った。



「ごめんなさいい……!!」

「なさいい……!!」

マミゾウ直々にお仕置きのげんこつを賜り、わんわんと鳴きながら叫ぶ小平太。泣き腫らした目は真っ赤で、しゃくりあげる息も止まらない。兄の悲しみに感化されたか、隣で志郎も同じように泣いている。

遠く、興奮冷めやらぬままにわあわあど騒ぎ立てる貉達。今回の騒動の主犯であった兄弟を眺めながら、マミゾウは地面に座り込んだまま、やり切れぬ気持ちで紫煙を吹かす。

「やーれやれ、じや。まったく、人騒がせにもほどがあるのう」

「こつちの台詞だよ。ひやひやさせやがって。あいつら押さえるの大変だったんだぞ？」

口を尖らせるぬえに、マミゾウは服の泥を払って伸びを一つ。強張った背中をほぐして肩を回す。レンズにヒビの入った眼鏡をふつと吹いて埃を払い、鼻の上に乗せ直した。

「万が一にも気取られる訳にはいかんかったからのう。他に黒幕が潜んでおる可能性は残っておったしな。……ま、完全な疑心暗鬼だったわけじゃが」

「全くだ。ひでえ目に遭ったぜ」

隣の禅達も、あちこちに怪我こそしているが先程までの様子が嘘のように蘇っていた。

彼がさっきまで行っていたのは、狸の化術の基本中の基本、擬死。窮地に際して己を死んだように偽る術である。

マミゾウと禅達はこの決闘を通じて片方の死を偽り、騒動の黒幕を引きずり出すべく、ひと芝居を打ったのであった。

「文句を言いたいのはこっちじゃ。ばかすか本気で殴りおつて」「そりゃあ、鬱憤が溜まつてたからな。ちつとくらい痛い目見せねえと割に合わねえよ」

豪快に笑う禅達に、マミゾウも釣られて口元を緩める。お互い、特に打ち合わせなど無いままに挑んだ決闘だが、阿吽の呼吸でお互いの意図は伝わっていた。単に半ば本気で殴り合っていただけでも言える。が、少なくともマミゾウは、禅達がここであつさり死ぬような間抜け貉ではないと信じていた。

「お二人とも、お怪我は大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけあるか」

「まったくじやの。……痛つつ、おろく、もちつと優しくやってくれんか」

身を案じる源助に異口同音に答えるマミゾウと禅達。おろくの手当てを受けながら、マミゾウは痛み止めの薬草を詰めた煙管を吹かし、痛む肋に眉をしかめながら、紫煙を吐き出す。

（……さて。色々と済みはしたが、結局なんにも解決はしとらんのかな）

思いあまつた小平太の行動という形で表面化した今回の事件だが、その本質はより根深い。むしろ、分かりやすい黒幕や裏切り者がいないだけ、厄介で根の深い問題だと言えた。

動機こそ幼いものではあれど、二ツ岩大明神を燃やすとなれば重大事である。誰にも気付かれずに全てを済ませるなど、とても子貉一匹の手に負えることではないのだ。事前に小平太の意図を知りながら、あえて彼を止めようとせず、するがままに任せていた貉達がいはずだった。

そうでなければ、いくら身内の起こしたこととはいえ、禅達たちが見過すはずがない。

恐らくは積極的な加担ではなかっただろう。が、佐渡における二ツ岩マミゾウの不在が、彼らの心中の不安の種となつてそれを後押ししたのである。

「このままではいかんということかのう。しかし、だからと言ってどうしたものでも……」

一番簡単な解決法は、マミゾウが幻想郷を離れ、今すぐ佐渡に戻ることだ。だがマミゾウには当面そのつもりはなかったし、何度も結界を超えて行き来することは八雲の賢者に睨まれる原因となるだろう。

（……………ふむ）

洗面になつて眉を寄せ、顎を擦つて思索することしばし。二ツ岩貉はぼんと手を叩き、やおらその場に起きあがる。

「のう、皆、ちいと耳を貸せ」

「あん？」

「ひとつ、いいことを思いついたぞ」

「……またぞろ碌でもねえこと始めるつもりかよ」

露骨に顔をしかめる禅達。近くにいた貉たちも首を傾げ、何

事かと集まってくる。

顔をくっつけ合わせ、押し合いへしあい、ぎゅうぎゅうと円陣を組む貉たちの中で。

「とっておきの悪巧みじやよ」

マミゾウはひとり、不敵に笑うのだった。

続 ニッ岩貉化逆門 了

「結」に続く





【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。  
折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『続・ニッ岩貉化逆門』は、佐渡の団三郎貉ことニッ岩マミゾウさんが佐渡の思い出話をしたり、ぬえちゃんと共にニッ岩大明神の火事の謎を巡って佐渡へと戻り、盟友の貉たちと再会したりする「双六<sup>ごうろう</sup>めいた旅を描く、当サークル8冊目のオフセット本にして37冊目のSS本となります。

前作、『ニッ岩貉化逆門』の直接の続編となりました。ちよつとだけ加筆修正した再販分も同時頒布しておりますので、お持ちでない方は是非一緒にどうぞ。彼女たちの陽気で賑やかな旅を、少しでも楽しんでいただけましたら幸いです。

今回の表紙は前作同様、エンクロ様に描いて頂きました。佐渡の温泉宿で過ごすマミゾウさんとぬえちゃんの可憐さが溢れた一枚、どうも本当にありがとうございました。

また、執筆にあたり佐渡の巡礼にご同道頂いたね様、みずも様、こばしゅ様。その節は大変お世話になりました。特にでね様には全体の構成に関して、佐渡の地理や風俗まで踏み込んで相談に乗って頂きました。この場を借りてお礼をさせていただきます。ありがとうございます。

【奥付】

フタツイワムジナバケギヤモン  
「続 ニッ岩 貉 化 逆 門」

平成26年10月12日  
東方紅楼夢(第10回)

オルハザカサンバンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 <sup>あかがねおりは</sup>銅 折葉

印刷所:(株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。



——それでは。  
また次の機会にお会いできることを願って。

22:08 広島  
22:13

9月16日 23:50 京都  
06:48

09:03 東京  
09:12

10:49 新潟  
11:05

11:20 佐渡汽船  
11:30

12:35 両津

佐渡島

つつき

① 両津港

⑤ 金井温泉

④ 廻転表司 弁慶

⑥ 大神原

② 二つ岩大岩神

③ 東光寺